

富山県上市町

稗田 C 遺跡発掘調査報告書

－新稗田公民館新築工事に伴う緊急発掘調査－

2010年3月

上市町教育委員会



1



2

卷首図版 1 1. 調査区全景（北西より） 2. 特殊な脂土をもつ須恵器（実大）



卷首図版 2 1 – 30. 脂土分析資料（第3章第4節参照 番号は第8表に対応 約実大）

序

上市町は、北アルプス立山連峰の靈峰・劍岳の懷に抱かれた自然豊かな地であります。この上市町では、北陸地方で最初に発見された旧石器時代の遺跡として名高い「眼目新丸山遺跡」を嚆矢として、縄文時代には極楽寺遺跡・永代遺跡、弥生時代には江上弥生遺跡群、古墳時代には柿沢古墳群・斉神新古墳群というように、各時代を通じて富山県を代表するような遺跡を残しながら連綿として人々の営みが続けられてきました。

ここに報告する稗田C遺跡は、奈良～平安時代を中心とする遺跡としてその存在は確認されていましたが、これまで調査された事例がなく詳細は不明でした。この度、地元稗田地区の公民館新築工事が計画されたことを受け、上市町教育委員会が発掘調査を実施いたしました。調査では建物跡などの明確な遺構こそ確認できませんでしたが、奈良時代を中心とする多量の遺物が出土いたしました。この時期の資料は町内ではこれまで断片的に知られていたに過ぎず上市町の歴史の上でわずかな空白を残していましたが、今回の調査で得られた成果はその空白を埋める非常に貴重な資料となりました。

ここにその成果をまとめた報告書を刊行する運びとなりましたが、本書が当遺跡の価値を後世に伝える記録となることはもとより、地域の皆様がその土地の有する歴史的な背景について理解を深めることに役立てば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にあたり多くご理解とご協力を賜りました地元稗田地区の皆様をはじめ、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、富山考古学会など関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月31日

上市町教育委員会

教育長 山本 靖

例　　言

1. 本書は、富山県中新川郡上市町稗田地内に所在する稗田C遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、新稗田公民館新築工事に伴い稗田町内会の依頼を受けて上市町教育委員会が実施した。なお、調査費用については上市町が負担し、県補助金の交付を受けた。

3. 調査期間及び面積は以下のとおりである。

試掘調査：平成21年4月16日～4月17日（実働2日）　　調査対象面積977m²

本発掘調査：平成21年10月29日～11月16日（実働10日）　　調査面積98m²

4. 調査事務局及び調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局　　上市町教育委員会事務局　　事務局長　　川上邦夫

　　同　　　　　主幹　高慶孝

　　同　　　　　主事　三浦知徳（調査担当者）

5. 本書の執筆・編集は三浦が行った。ただし、第3章第4節「稗田C遺跡出土須恵器の产地問題」については、大阪大谷大学　三辻利一氏に玉稿を賜った。

6. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、下記の方々の指導、助言及び協力を得た。記して深く謝意を表したい。
土地所有者及び稗田町内会各位

朝田亜紀子（富山県文化振興財団）、池野正男（富山県文化振興財団）、越前慶祐（富山県埋蔵文化財センター）、

岡田一広（富山考古学会）、河西健二（富山県文化振興財団）、鹿島昌也（富山市教育委員会）、

久々忠義（富山県文化振興財団）、黒崎直（富山大学人文学部）、塩田明弘（魚津市教育委員会）、

砂田普司（瑞浪市教育委員会）、高橋浩二（富山大学人文学部）、野末浩之（滑川市立博物館）、

野原大輔（砺波市教育委員会）、橋本正春（富山県埋蔵文化財センター）、廣瀬直樹（氷見市教育委員会）、

藤田富士夫（敬和学園大学人文社会科学研究所）、舟崎久雄（富山考古学会）、の場茂晃（魚津市教育委員会）、

間野達（立山町教育委員会）、三浦亜友美（立山町埋蔵文化財センター）、宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）

※個人名は50音順、敬称略

7. 発掘調査及び整理作業の参加者は次のとおりである。

発掘調査：荒木智恵子、岡部つる江、金子みづゑ、甚内みき子、高城英子、高城富美子、早崎秋子、

　　樋口正一、松本純一

整理作業：田上和彦（富山大学大学院生）、今津和也、北村史織、繭羅文佳、東海林心（以上富山大学学生）、

　　越野由香、澤崎文子、古川理恵

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経過	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	3
第3章 調査結果	6
第1節 調査の概要と層序	6
1. 調査の方法	6
2. 土層の堆積状況	6
第2節 遺構	9
第3節 遺物	9
1. 遺物の出土状況	9
2. 遺物の概要	12
(1) SP01 出土遺物	12
(2) 遺構外出土遺物	12
a. 須恵器	12
b. 土師器	20
c. 土製品	20
d. 灰釉陶器	20
第4節 種田C遺跡出土須恵器の産地問題	28
1. はじめに	28
2. 分析方法	28
3. 分析結果	29
第4章 まとめ	37
調査の概要	37
須恵器の産地について	37
種田C遺跡の背景について	38
参考文献	39
報告書抄録	57

挿図目次

第 1 図	稗田 C 道路の位置	1
第 2 図	地形と周辺の道路	2
第 3 図	道路の範囲と調査対象地区の位置	4
第 4 図	調査対象地区詳細図	5
第 5 図	調査区割図	6
第 6 図	基本層序模式図	6
第 7 図	土層断面図	7
第 8 図	遺構全図	8
第 9 図	SP01 平面図・断面図	9
第 10 図	3 層～4 層上面の遺物出土状況	11
第 11 図	遺物実測図（1）SP01 出土遺物、須恵器	14
第 12 図	遺物実測図（2）須恵器	15
第 13 図	遺物実測図（3）須恵器	16
第 14 図	遺物実測図（4）須恵器	17
第 15 図	遺物実測図（5）須恵器	18
第 16 図	遺物実測図（6）須恵器	19
第 17 図	遺物実測図（7）土師器	21
第 18 図	遺物実測図（8）土師器、土製品、灰釉陶器	22
第 19 図	中山王窯群（A 地点）出土須恵器の両分布図	33
第 20 図	中山王窯群（B 地点）出土須恵器の両分布図	33
第 21 図	中山王窯群（C 地点）出土須恵器の両分布図	33
第 22 図	Fe 因子の比較	34
第 23 図	Na 因子の比較	34
第 24 図	尾北窯群出土須恵器の両分布図	35
第 25 図	尾北窯群出土灰釉陶器の両分布図	35
第 26 図	万年寺谷窯跡出土須恵器の両分布図	35
第 27 図	上末窯跡出土須恵器の両分布図	35
第 28 図	稗田 C 道路出土須恵器の両分布図	36
第 29 図	古代新潟都における須恵器窯の消長	37
第 30 図	古代郷域と莊園推定地	38

表目次

第 1 表	遺物集計表	10
第 2 表	遺物観察表（1）	23
第 3 表	遺物観察表（2）	24
第 4 表	遺物観察表（3）	25
第 5 表	遺物観察表（4）	26
第 6 表	遺物観察表（5）	27
第 7 表	中山王窯跡群出土須恵器の分析データ	32
第 8 表	稗田 C 道路出土須恵器の分析データ	32

写真図版目次

図版 1	周辺航空写真（1953 年撮影）	40
図版 2	周辺航空写真（2008 年撮影）	41
図版 3	調査写真（1）	42
図版 4	調査写真（2）	43
図版 5	調査写真（3）	44
図版 6	調査写真（4）	45
図版 7	調査写真（5）	46
図版 8	調査写真（6）	47
図版 9	遺物写真（1）SP01 出土遺物、須恵器	48
図版 10	遺物写真（2）須恵器	49
図版 11	遺物写真（3）須恵器	50
図版 12	遺物写真（4）須恵器	51
図版 13	遺物写真（5）須恵器	52
図版 14	遺物写真（6）須恵器	53
図版 15	遺物写真（7）須恵器	54
図版 16	遺物写真（8）土師器	55
図版 17	遺物写真（9）土師器、土製品、灰釉陶器	56

第1章 遺跡の位置と環境

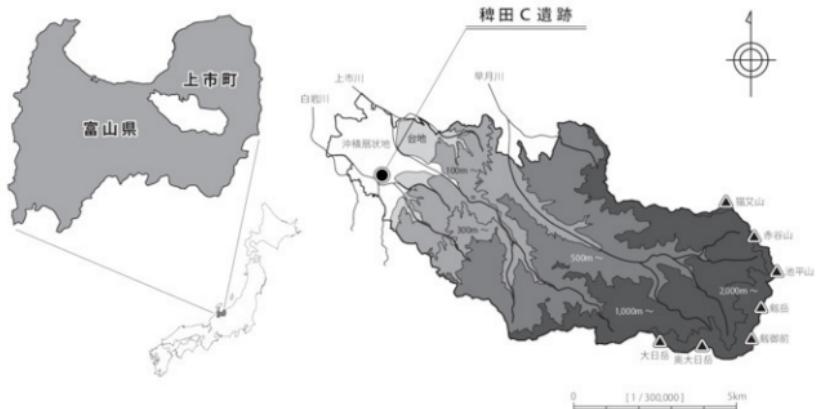
稗田C遺跡は、富山県中新川郡上市町稗田地内に所在する(第1・2図、図版1・2)。遺跡は上市川及び白岩川によって形成された沖積扇状地上に立地し、標高は30m前後を測る。早乙女岳及び大辻山に源を発して日本海に注ぐ上市川は、江戸時代前期に当時の筆頭十村役・正印次郎兵衛の手によって現在の流路に固定されるまでは、極楽寺・丸山の段丘崖に沿って西流して川原田付近で白岩川に合流していたとされ、稗田C遺跡はこの旧河道と白岩川の間に位置する微高地上に占地していたことになる。

この上市川旧河道及び白岩川に挟まれた地域の遺跡の展開を概観すると、まず上市川左岸段丘上に眼目新丸山遺跡(丸山B遺跡)・極楽寺遺跡・丸山A遺跡、白岩川支流の須山川右岸段丘上に湯神子A遺跡など旧石器～縄文時代の著名な遺跡が集中して残されている。その後弥生時代・古墳時代を通じてこの地域における人間活動の痕跡は希薄となるが、丘陵上には弥生時代末～古墳時代前期に位置付けられる柿沢古墳群が存在し、断片的ながらも該期の遺物が出土している湯神子D遺跡のような集落が近隣に展開していたことが想定される。

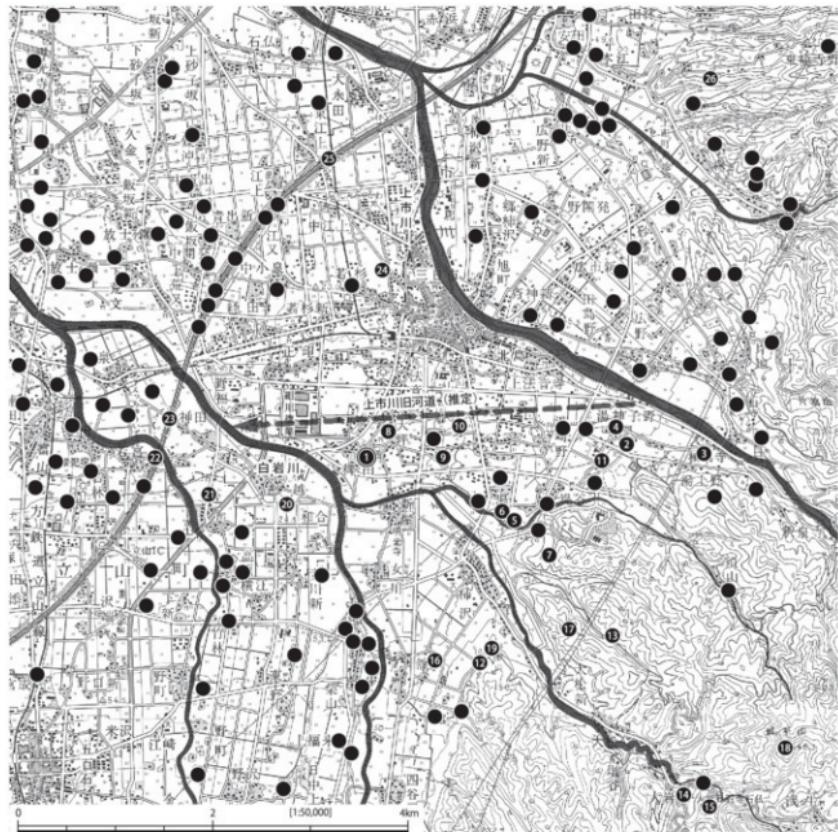
古代になると、飛鳥時代には丘陵据部において堤谷横山窯跡(6世紀末～7世紀初頭)や中山王窯跡群(7世紀初頭～8世紀初頭)で須恵器生産が行われた。堤谷横山窯跡は古代新川郡域における最古の須恵器窯跡であり、また中山王窯跡群では瓦の生産も行われているなど、この地域が当時の新川郡において非常に重要な位置を占めていたことを示している。その後、奈良時代には扇状地上において稗田C遺跡・稗田A遺跡・稗田大門添遺跡・稗田善界遺跡などの集落が営まれるようになり、この時期に低地部の開発が活発に行われたことがわかる。平安時代には、国指定史跡・重要文化財として著名な大岩日石寺磨崖仏や大岩京ヶ峰経塚など密教系の宗教遺跡や、先の須恵器窯跡群とは背景が異なると推定される亀谷窯跡が山中に残されるなど、山間地の開発が進行する。

また、中世には平野部から山頂部にかけて弓庄城跡をはじめとする土肥氏の城館群が築かれて周辺支配の拠点となるとともに、戦国時代末期における佐々成政との激しい攻防戦の舞台ともなった。

周辺に目を転じると、古代の遺跡としては白岩川の対岸に横越遺跡・辻遺跡・若宮B遺跡・神田遺跡、上市川旧河道の対岸方向に若杉堺田遺跡・東江上遺跡などがある。このうち白岩川流域の遺跡群は、東大寺領莊園大蔵莊(大蔵莊)という背景を通して稗田C遺跡との強いつながりが想定されるものであり、重要である。



第1図 稗田C遺跡の位置



No.	道跡名	時代	種別	備考
1	稗田C道跡	古代（奈良・平安）	集落	調査地
2	堀川新丸山道跡	旧石器・縄文（中）	散布地・集落	丸山B道跡
3	極楽寺道跡	縄文（前・中）	散布地・集落	
4	丸山A道跡	縄文（中・晚）	散布地・集落	
5	湯神子A道跡	縄文（中）・古代（平安）	散布地・集落	
6	湯神子D道跡	縄文（中）・弥生～古墳	散布地・集落	
7	柿沢古墳群	古墳	古墳	
8	稗田A道跡	古代（奈良）	集落	
9	稗田大門跡道跡	古代（奈良・平安）	散布地・集落	
10	稗田界隈道跡	古代（奈良・平安）	散布地・集落	
11	堤谷横山道跡	古代（飛鳥）	生産（窯）	須恵器
12	中山王墓跡群	古代（飛鳥・奈良）	生産（窯）	須恵器・瓦・灰
13	龟谷跡	古代（平安）	生産（窯）	須恵器

No.	道跡名	時代	種別	備考
14	大岩白石寺道跡	古代（平安）～中世（鎌倉）	その他（石仏）	国史跡・重文
15	大羽京ヶ峰跡	古代（平安）	跡塚	
16	引城跡	中世（鎌倉～戦国）	集落・城館	町史跡
17	柿沢城跡	中世（戦国）	山城	
18	若荷谷山城	中世（戦国）	山城	
19	郷山小跡	中世（戦国）	山城	
20	横越道跡	古代（奈良）・中世	散布地	
21	辻道跡	縄文～近世	集落・城館	一部立山町
22	若宮道跡	縄文～近世	集落	一部立山町
23	神田道跡	古代（奈良・平安）・中世	集落	
24	若杉町道跡	古代（奈良・平安）	散布地	
25	東江上道跡	古代（飛鳥・奈良）	集落	
26	万年寺谷道跡	古代（平安）	生産（窯）	須恵器、滑川市

第2図 地形と周辺の遺跡〔縮尺 1/50,000〕

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年冬、稗田町内会では既存公民館施設の老朽化を受けた新公民館の新築事業が具体化し、上市町教育委員会宛てに口頭で建設予定地における埋蔵文化財包蔵地の有無の照会が行われた。建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「稗田C遺跡」の範囲外ではあるが隣接しており、確認のため平成21年3月に上市町教育委員会が現地の踏査を行ったところ、地表面に奈良・平安時代の須恵器を中心とする多量の遺物が散布している状況を確認した。これにより、埋蔵文化財包蔵地範囲の見直しと試掘調査の実施が必要である旨について稗田町内会へ報告し、さらに4月9日には包蔵地範囲の見直しを目的とした周辺踏査を実施した。その結果、稗田C遺跡と稗田B遺跡の間に位置する畑地や水田においても同時期の遺物が散布し、また地形的にも連続している状況が窺われたことから、稗田C遺跡の範囲を北側に拡大し、稗田B遺跡を統合することとした（第3図）。

試掘調査は4月16日・17日の2日間で実施した。調査は、工事計画範囲977m²のうち耕作中の部分を避けて5箇所の試掘トレーナー及び3箇所の土層確認調査坑を設定し、人力掘削によって遺構・遺物の確認を行った（第4図）。その結果、現況で東西に3面並ぶ耕作面のうち下位（西側）の2面は既に遺物包含層及び遺構面が削平されていたものの、最上位（東側）の1面については遺物包含層・遺構面ともに残存していることが判明した。これにより、工事計画範囲東端で帶状に損壊を受けることとなる約98m²について、本発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

なお、本発掘調査費用については、「稗田町内会」としての負担が困難であること、開発目的自体が公共性の高い事業であることなどにより、上市町が富山県補助金を得て負担することとした。

第2節 調査の経過

本発掘調査は調査区内における耕作中の農作物が収穫を終えてから開始し、現場準備に着手したのは平成21年10月27日である。また、実際に作業員を動員して発掘作業を行ったのは10月29日から11月16日にかけてで、雨天等による中止日を除く実働日数は10日間である。以下にその概要を述べる。なお、文中の地区名・土層名・遺構名等については次章で解説する。

10月27日（火）：現場準備（機材搬入）

28日（水）：現場準備（調査区設定等）

29日（木）：1～6区1層（表土・耕作土層）掘削

30日（金）：3～6区2層（床土）掘削、3～5区3層（遺物包含層）掘削・遺物取り上げ開始

11月2日（月）：6区3層掘削・遺物取り上げ開始

4日（水）：1・2区a・b層（造成土・床土）除去、X77025 ライン土層断面図作成

5日（木）：X77025 ラインベルト除去、SX01 検出・調査

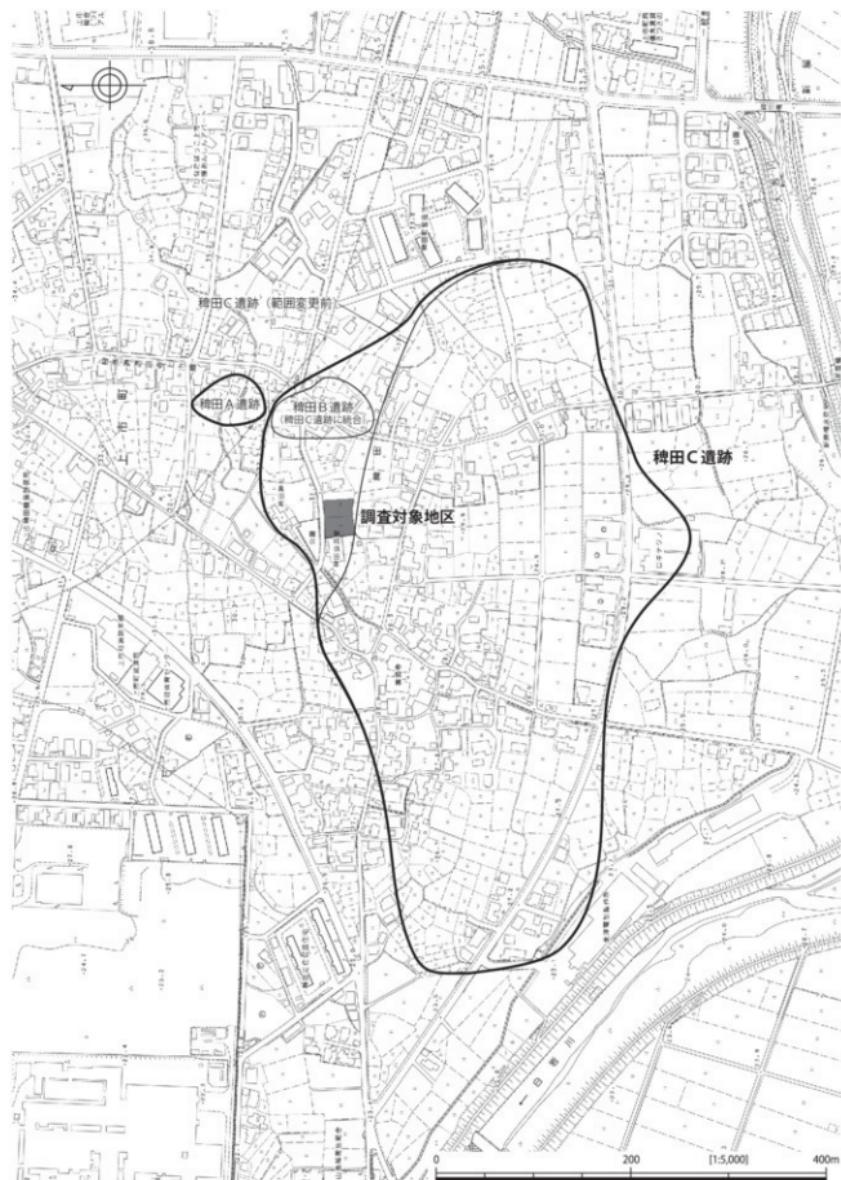
6日（金）：3・4区3層掘削終了、4層（地山層）上面精査・遺物取り上げ開始

9日（月）：調査区外1層中遺物検出・取り上げ開始（以後調査終了まで隨時継続）

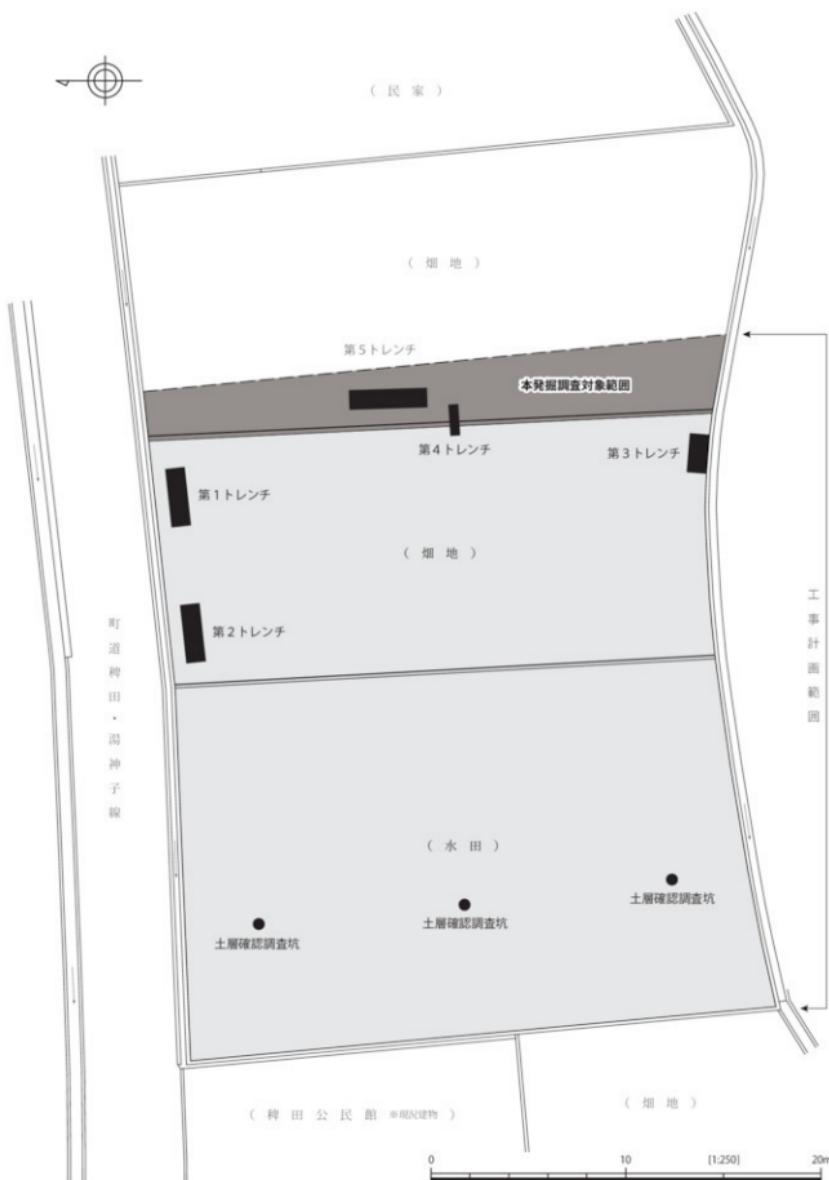
12日（木）：5・6区3層掘削終了、4層上面精査・遺物取り上げ開始

13日（金）：X77005・X77015 ライン土層断面図作成・ベルト除去、7区掘削

16日（月）：SP01 検出・調査、3～7区4層上面遺物取り上げ、完掘状況記録作成、現場撤収



第3図 遺跡の範囲と調査対象地区の位置 [縮尺 1/5,000]



第4図 調査対象地区詳細図 (縮尺 1/250)

第3章 調査結果

第1節 調査の概要と層序

1. 調査の方法

今回の調査では、調査区が狭長でほぼ南北に伸びる状況であったことから、通常のグリッド設定は行わず世界測地系の平面直角座標X軸を利用して5mおきに区分し、北から順に1～7区を設定して調査単位とした（第5図）。このうち、2区と3区の境界（X77025 ライン）、4区と5区の境界（X77015 ライン）、6区と7区の境界（X77005 ライン）にはそれぞれ土層観察用のベルトを設けた。

以上の地区割を単位として上層から順に掘削を進めたが、表土・耕作土中にも多くの遺物が含まれていることが窺われたため、重機による表土掘削は行わず全て人力によって掘削を行った。また、遺物の取り上げに際しては1層・2層中の遺物は地区・層位ごとに一括して取り上げたが、主たる遺物包含層である3層～4層上面の遺物については可能な限り3次元座標を記録して取り上げた。

なお、遺物包含層・遺構面が残存しておらず本発掘調査の対象外となった調査区西側の畠地でも多くの遺物が散布していたため、調査期間中に随時踏査及び簡易な掘削を行って遺物の回収に努めた。

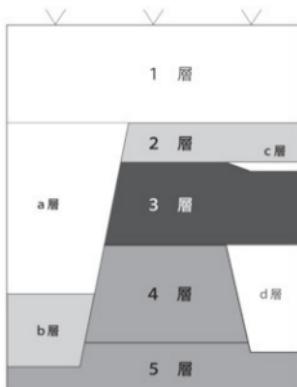
2. 土層の堆積状況

今回の調査区内における土層は、基本的には上位から1層（10YR3/2 黒褐色土）／2層（10YR4/4 褐色砂質土～10YR3/3 暗褐色土、上部ほど赤み強く砂質多い）／3層（7.5YR2/1 黑色土、1mm 大の砂粒多く含む）／4層（10YR4/3 に似る黄褐色土、1mm 大の砂粒多く含む）／5層（2.5YR5/3 黄褐色砂質土）の順で堆積する（第6・7図）。1層は表土及び耕作土、2層は床土、3層は遺物包含層、4層以下は地山で、4層上面が古代の遺構検出面である。

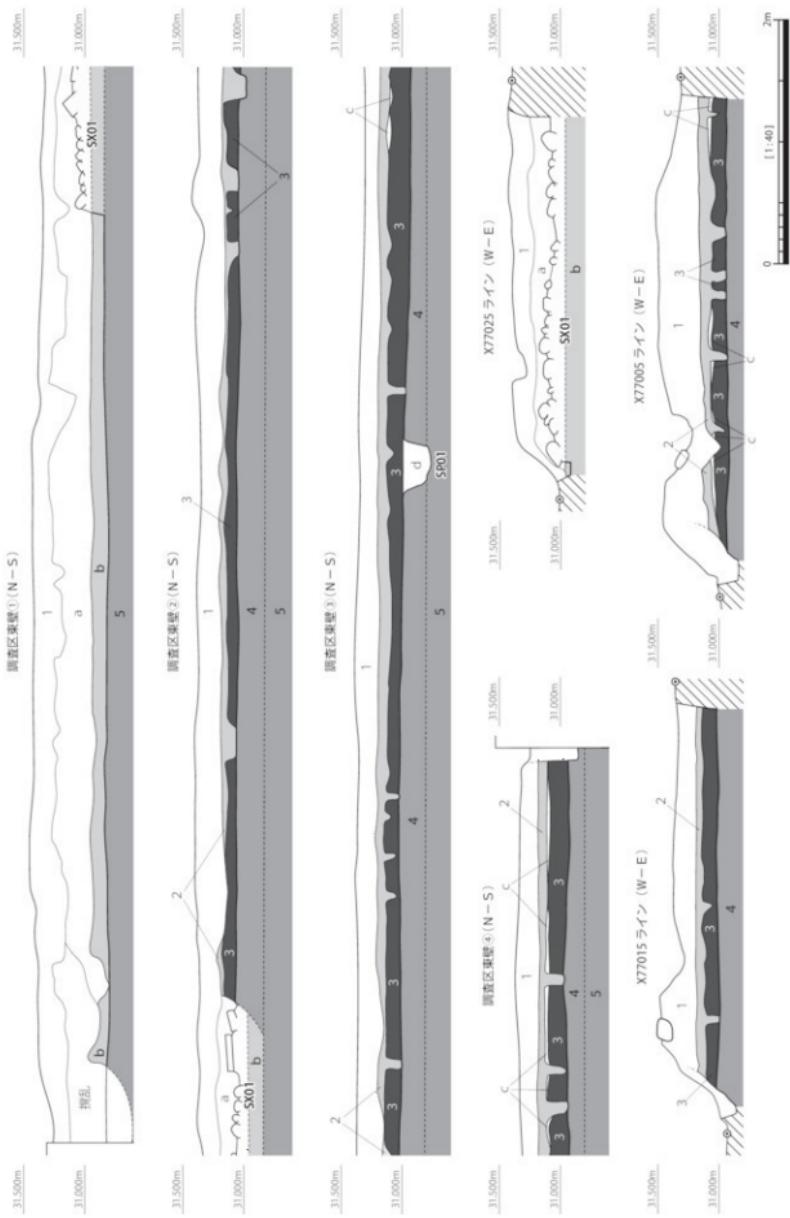
この基本層序に対し、X77024 以北では1層の下位に a 層（10YR3/2 黒褐色土、灰褐色砂・2層由来ブロック含む）・b 層（10YR4/4 褐色砂質土）が堆積する。b 層はかつて2層以下を削平して設けられていた1段低い耕作面の床土であり、土相は2層とほぼ共通する。a 層はその面の耕作土及びその後の造成土であり、後述する SX01 はこの層中に含まれている。また、X77008 以南においては部分的に3層上面の凹みを埋めるように c 層（2.5Y7/2 灰黄色粘質土）が堆積する。性格は不明であるが、2層の造成に伴う何らかの作業の痕跡であろう。d 層（10YR3/3 暗褐色土、炭化物粒若干含む）は、5 区で検出した穴 SP01 の埋土である。



第5図 調査区割図 [縮尺 1/250]



第6図 基本層序模式図





第8図 遺構全体図 [縮尺 1/80]

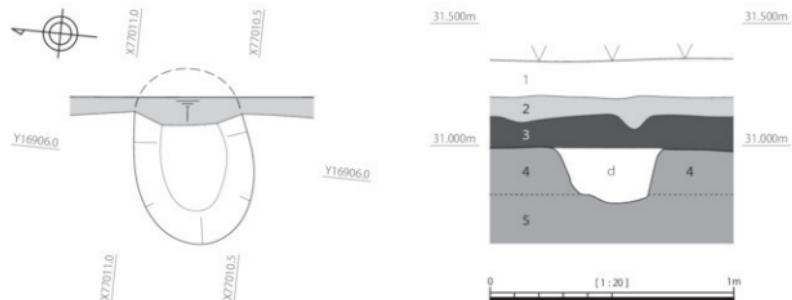
第2節 遺構

今回の調査区内では、土層堆積状況から遺構面と判断した4層上面の精査を繰り返し実施したが、古代に遡りうる遺構としては5区南端付近の東壁際において性格不明の穴1基(SPO1)を検出したのみである(第8図)。

SPO1(第9図)は楕円形の穴で、検出範囲では長さ55cm・幅48cmを測る。東側は調査区外へと続く、全長は70cm程度と推定される。深さは22cmで、掘り込みは5層に達する。埋土はd層とした暗褐色土で、微小な炭化物粒を若干含む。埋土内からは須恵器口縁部の小片1点と土師器裏部片3点が出土している(第11図1・2)。

2区～3区にわたって確認したSX01は、幅約240cm・長さ約280cmの東西に伸びる帶状の集石で、東側は調査区外へと続く。集石はa層とした旧耕作土・造成土中に包含され、集石内にはコンクリート瓦片・現代磁器類を含む。X77024以北にかつて存在した1段低い耕作面を埋める際に施された地業の痕跡と判断できる。

その他、X77020以南の調査区西端部に南北に伸びる溝状の痕跡は畦畔構築時の掘り込み痕であり、この搅乱を境として西側では遺物包含層・遺構面ともに削平・消滅していることが試掘調査第4トレンチでも確認されている。



第9図 SPO1平面図・断面図〔縮尺1/20〕

第3節 遺物

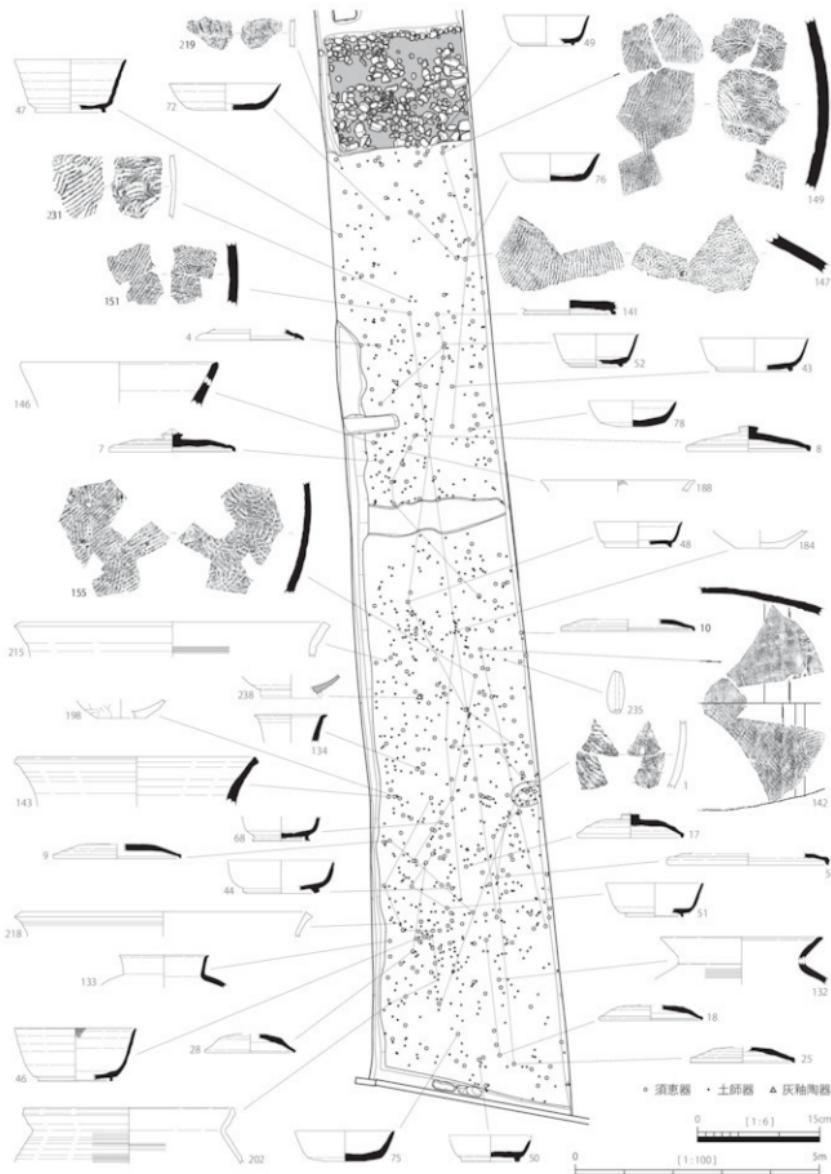
1. 遺物の出土状況

遺物は、事前の確認踏査・試掘調査・本発掘調査を合わせて破片数で2,051点出土した(第1表)。このうち本発掘調査によって出土したのは1,683点で、その内訳は須恵器411点、土師器1,255点、灰釉陶器1点、珠氈2点、越中瀬戸12点、その他(土製品・近世磁器)2点である。平面的に見ると、1区28点、2区50点、3区184点、4区355点、5区507点、6区510点、7区49点となり、5区・6区が多い。遺構に伴って出土したのはSPO1の4点のみで、層位的に見ると1層66点、2層179点、3層1,117点、4層179点、その他138点となる。3層・4層出土の遺物は、1点の越中瀬戸を除き全て古代に属するものである。なお、4層としたものはその上面(遺構面)に食い込むようにして出土したため調査時にも注意していたものであるが、検討の結果、3層出土遺物と比較して特に古相を示すこともなく、またその分布も有意なものではないものと判断された。

第10図は、3層～4層上面から出土した遺物のうち3次元座標を記録できたものについて出土状況を示したものである。全体的な傾向を反映して5区・6区付近に集中するもののほぼ満遍なく分布しており、特に有意なまとまりをもってブロック状に密集する地点等は確認できない。古相を呈する遺物(4・188・219等)は調査区北半に多いという傾向はあるものの明確ではなく、器種や年代による偏在性は特に認められない。また、接合関係をみると比較的広範囲にわたっているものが多く、遠いものでは約12.5mを隔てて接合している(151)。

第1表 遺物集計表

地 区	層 位	須恵器	土師器	灰釉陶器	珠 洋	越中瀬戸	その他	計	備 考
1 区	1 層	2	0	0	0	0	0	2	
	a 層	6	11	0	0	1	0	18	
	b 層	4	2	0	0	0	0	6	
	混 乱	0	2	0	0	0	0	2	
	計	12	15	0	0	1	0	28	
2 区	1 層	1	2	0	0	0	0	3	
	a 層	8	18	0	0	0	0	26	
	b 層	5	12	0	0	4	0	21	
	計	14	32	0	0	4	0	50	
3 区	1 層	8	2	0	0	1	1	12	
	a 層	2	0	0	0	0	0	2	
	2 層	4	13	0	0	0	0	17	
	3 層	55	93	0	0	0	0	148	
	4 层	3	2	0	0	0	0	5	上 面
	計	72	110	0	0	1	1	184	
4 区	1 層	8	12	0	0	2	0	22	
	2 層	12	35	0	0	1	0	48	
	3 層	41	186	0	0	1	0	228	
	4 层	6	17	0	0	0	0	23	上 面
	混 亂	6	28	0	0	0	0	34	
	計	73	278	0	0	4	0	355	
5 区	1 層	1	3	0	0	1	0	5	
	2 層	8	58	0	0	0	0	66	
	3 層	87	295	1	0	0	0	383	
	4 层	8	26	0	0	0	0	34	上 面 埋土内
	SPOI	1	3	0	0	0	0	4	
	混 亂	4	11	0	0	0	0	15	
	計	109	396	1	0	1	0	507	
6 区	1 層	4	2	0	1	1	1	9	
	2 層	6	27	0	0	0	0	33	
	3 層	62	280	0	0	0	0	342	
	4 层	46	69	0	0	0	0	115	上 面
	混 亂	2	9	0	0	0	0	11	
	計	120	387	0	1	1	1	510	
7 区	1 層	4	8	0	1	0	0	13	
	2 層	4	11	0	0	0	0	15	
	3 層	3	13	0	0	0	0	16	
	4 层	0	2	0	0	0	0	2	上 面
	混 亂	0	3	0	0	0	0	3	
	計	11	37	0	1	0	0	49	
調査区内 計		411	1,255	1	2	12	2	1,683	
調査区外		67	73	0	0	3	1	144	1 層中
本 調査合 計		478	1,328	1	2	15	3	1,827	
試 挖	第1トレンチ	0	2	0	0	0	0	2	
	第2トレンチ	3	5	0	0	1	2	11	
	第3トレンチ	1	4	0	0	0	1	6	
	第4トレンチ	5	17	0	0	0	0	22	
	第5トレンチ	30	75	0	0	1	0	106	
	計	39	103	0	0	2	3	147	
表面採集		69	3	1	3	0	1	77	事前踏査
総 計		586	1,434	2	5	17	7	2,051	



第10図 3層～4層上面の遺物出土状況 [縮尺1/100]

2. 遺物の概要

(1) SP01出土遺物（第11図、第2表）

第11図1・2は土師器の甕である。別個体ではあるが、いずれも外面には平行線文叩き目、内面には不定方向の密な刷毛目を施す。2は外面全体に煤が付着している。

(2) 遺構外出土遺物（第11～18図、第2～6表）

ここでは、本発掘調査出土遺物だけではなく事前の確認踏査や試掘調査等で得られた遺物も一括して取り扱う。紙数の都合もあり本文では種別・器種ごとにその特徴を記すこととし、各遺物の詳細な属性等については遺物観察表（第2～6表）を参照されたい。

a. 須恵器（第11～16図）

須恵器は、杯蓋・有台杯・無台杯・碗・皿・高杯・壺蓋・壺瓶類・甕が出土している。数量的には供膳具類が多数を占めるが、碗・皿は僅少である。

杯 蓋 3～42は杯蓋である。3・4は内面に身受けのかえりをもつもので、口径の大小（18.6cm、13.0cm）が認められる。いずれもかえりは低く、3では頂部外面に回転削りを施す。（図中矢印範囲、以下同様）。

5～33は内面にかえりをもたない一群である。全形を窺える資料は少ないので、遺存部から判断する限り無鉢の個体は確認できず、鉢が遺存するものではいずれも扁平な宝珠形である。これらは、端部の作工によって①端部を下方に屈曲させて断面三角形ないし内側に稜をもつ台形状におさめるもの（5～21）、②下方に屈曲させた端部の先端が外反し外端面に凹面が形成されるもの（22～27）、③端部を丸みを帯びた形状におさめるもの（28～33）、の3種に区分できるが、曖昧なものも多い。数量的には①としたものが支配的である。口径による区分では、①は大型（19.6cm、5・6）／中型（15.0～17.0cm、7～16）／小型（11.4～12.8cm、17～21）の3種、②は中型（14.4～16.8cm、22～24）／小型（12.4～13.0cm、25～27）の2種、③は小型のみ（10.2～13.8cm）という構成となる。天井部の遺存する個体では頂部外面に回転削りを施すものが一定量認められる（5・7・9・10・17・18・20・25）。28・29は筐切りによる切り離し後に粗い撫でを施すものである。なお、今回の出土遺物中には頂部を回転糸切りによって切り離したもののは確認できない。

34・35は鉢を含む天井部、36～39は体部、40～42は鉢の破片である。38は内面に「十」の筐記号がある。

有台杯 43～70は有台杯で、上記の杯蓋とセット関係をなすものである。全形を窺える資料が少なく明確ではないが、法量による区分では大型（口径16cm以上？、54）／中型（口径13.0～14.8cm、43～47）／小型（口径10.2～12.0cm、48～53）の3種が認められ、中型品はさらに器高の高い深身の一群（46・47）が分離できる。また、小型品のうち52・53は口径に対する器高の比率がやや高く（径高指数38.7～41.7）、48～51（同29.6～36.5）とは雰囲気を異にしている。新相を示すものとして区分できよう。

54～70は底部である。高台径は6.0～10.4cmまで幅があるが、およそ8cmを境として前述の大・中型／小型品に対応するようである。有台杯全体の高台の作工をみると、48・65を除いて全て断面方形の貼付け高台で、高台を底部の外端付近に付すもの／内側寄りに付すもの、高台が外方に踏ん張り内端で接地するもの／ほぼ垂下水平に接地するもの、高台幅が広いもの／狭いもの、高台端面が平坦なもの／凹むもの、などが様々に組み合わされている。

48・65は底部外端付近に断面三角形の高台を丁寧な撫で付けによって付すものである。いずれも胎土が非常に堅緻で空隙がほとんどなく、破断面には光沢を帯びる部分も認められるなど、一見して他の須恵器とは異なっている。底部の作工及び胎土の双方において近隣では類例が見当たらなかったことから他地域に類例を求めたところ、愛知県尾北窯内高藏寺第2号窯跡（8世紀後半期）のものに形態的には酷似することが判明した。ただし、蛍光X線による胎土分析の結果では当該地域からの搬入品である可能性はなく地元産であるものとされており、実態は不明のままである（次節参照）。なお、同様な胎土をもつものとしては他に杯蓋（39）・杯（105・122・123）があり、また色調は異なるが壺ないし瓶（138～140）も他の須恵器と比して著しく緻密な胎土であることから一連のものと

して捉えられる可能性が高い。

無台杯 71～93は無台杯である。数量的には有台杯より少ない。口径による区分では大型（13.2～14.2cm、71～73）／中型（12.2～12.4cm）／小型（10.8cm、77・78）の3種が認められるが、大型／中型は漸移的で区分は明確ではない。器形的には平坦な底部から外方に緩やかに広がりながら伸びる体部・口縁部を持つものが主体的であるが、丸みをもつ底部を有する個体（75・77～79）も存在する。ほとんどの個体は外底面の笠切り痕を撫で消しているが、75・79・80は回転笠切り痕を残している。

杯（口縁部） 94～123は有台杯ないし無台杯の口縁部である。一部に碗の口縁部を含んでいる可能性がある。口径による区分では、概ね大型（16.2～18.2cm、94～97）／中型（13.0～15.0cm、98～105）／小型（10.4～12.6cm、106～120）の3種となり、その他として口径8.6cmの極小型品（121）がある。これらは、深身の体部となる97～99・103や高台へと至る痕跡を有する100などについては有台杯と判断できるが、全ての資料について有台杯・無台杯のどちらに対応するものか明確に区別することは困難である。ただし、器壁の厚さや焼成具合などの印象からは大半が有台杯であるものと推測される。なお、103は体部外面に2条の沈線が巡り、106は体部外面にやや鋭い原体によって「十」と刻まれている。

105・122・123は前述した特殊な胎土をもつ一群に含まれるものである。このうち123は端面に沈線を有する厚手の破片で、杯ではない可能性が高いが一応ここに含めたものである。

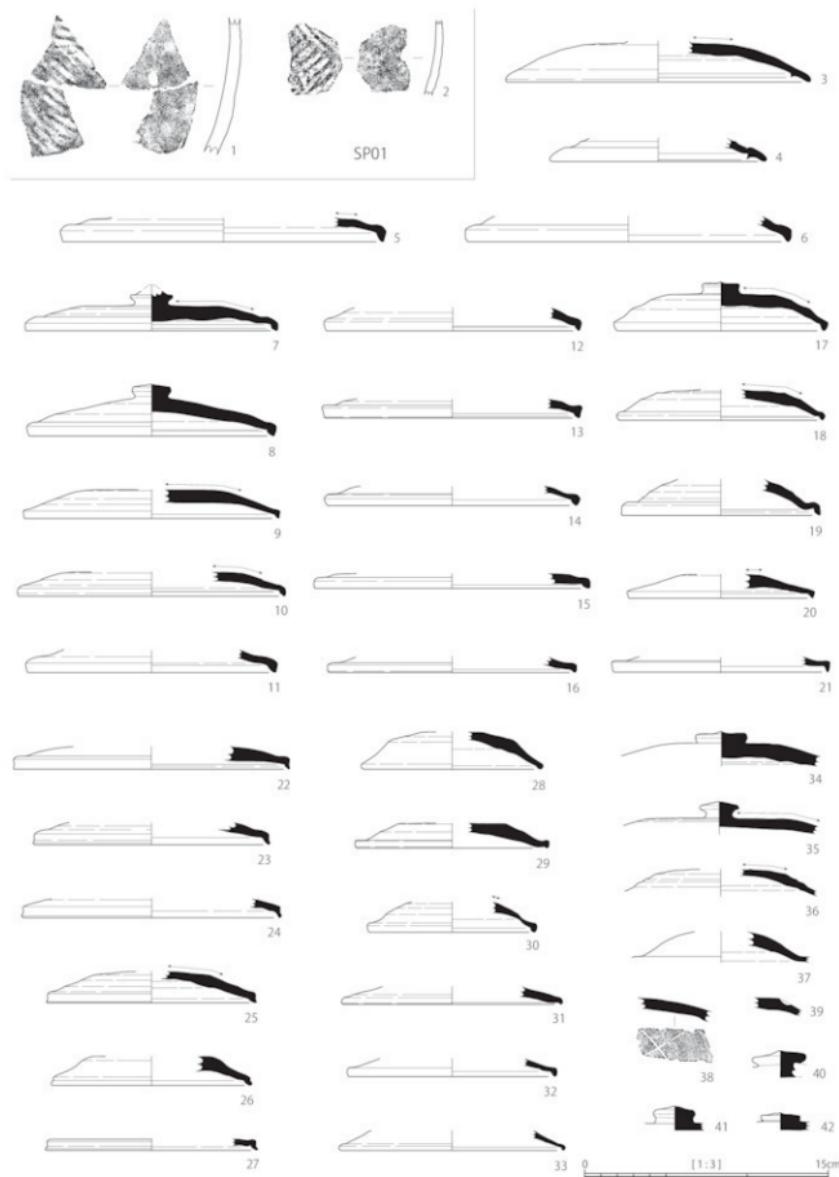
碗・皿 少量のみの出土で、124・125は碗、126～128は皿の底部である。124～126は外底面に回転笠切り痕を残し、このうち124は底部外端付近にごく低い矮小化した高台を付す。127は背の高い薄手の高台を付する皿で、高台だけではなく全体的に薄手のつくりとなっている。128は外底面に笠切り痕を撫で消した痕跡が残るもので無台杯の可能性もあるが、身の開きが大きいため一応ここに含めた。

高杯 129は高杯の脚部で、低く開きの強い形態である。破片下端部には屈曲する端部へと至る痕跡が認められる。
壺蓋 130・131は壺蓋と判断したものである。130は口縁部を一度内側に屈曲させてから重下させて段を設けている。131は頂部外面に回転笠削りを施す。

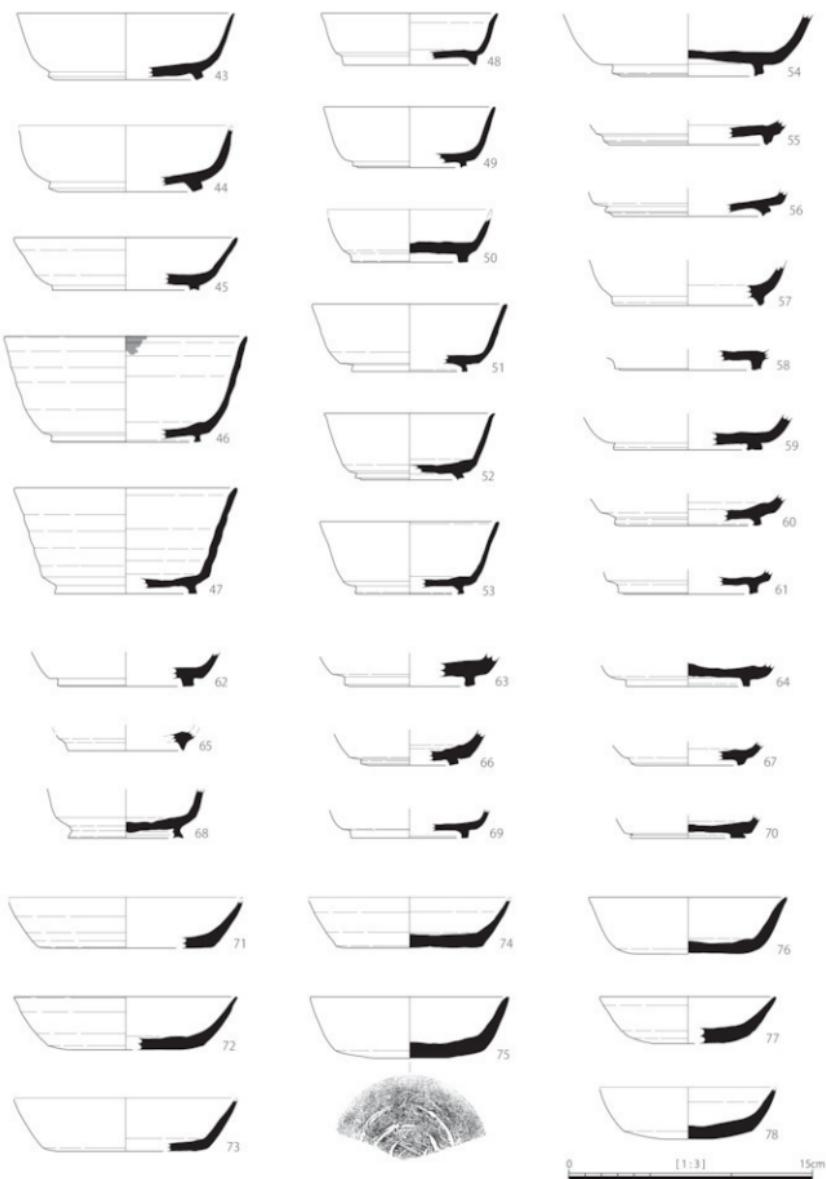
壺瓶類 132～142は壺瓶類である。全形を窺える資料がなく器種構成等の詳細は不明である。132～134は口縁部で、大きく聞くもの（132）、短く直立するもの（133）、長頸となり得るもの（134）がある。135～140は体部で、このうち138～140は同一個体と判断できるもので、前述した特殊な胎土をもつ一群に類似するものである。外面に平行線文叩き目を残す。141は低い高台を有する底部で、外底面には笠切り痕を撫で消した痕跡が認められる。142は横瓶の体部で、外面には擬格子状の平行線文叩き目、内面には同心円文叩き目と回転撫でを施している。

甕 143～176は甕で、体部の一部に壺瓶類を含んでいる可能性がある。143～146は口縁部で、145は外面に笠描きによる波状文が2条横走する。147～176は体部で、このうち147～154は口縁部の146と同一個体と判断したものである。外面は平行線文叩き目の後に搔き目を施し、底部付近では搔き目が円弧状となる。内面は比較的細密な原体による同心円文叩き目（当具痕）である。その他の資料についても、原体の粗密の差はあるものの概ね外面が平行線文叩き目（+搔き目）、内面が同心円文叩き目という組み合わせとなるものが多い（155～173）。ただし、内面にも平行線文叩き目を施すものが少量ながら認められる（174～176）。なお、155～158、159・160、161・162、163・164はそれぞれ同一個体と判断できるものである。

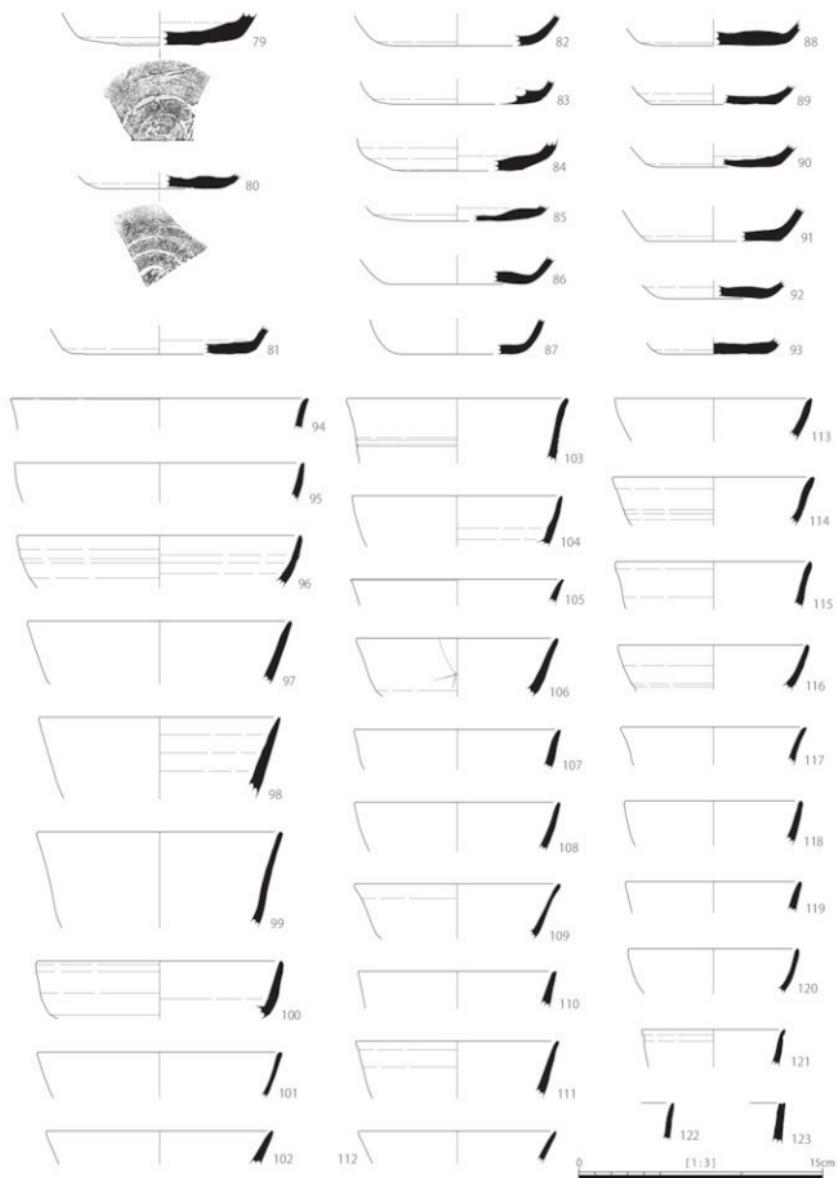
須恵器の年代 以上に述べてきた須恵器の年代については、その大部分が田嶋明人氏による古代土器編年（田嶋1988）のⅢ期～Ⅳ2期、概ね8世紀中葉～後半代を中心とする時期のものと判断した。その前後段階の資料としては、古いものでは杯蓋のうち身受けのかえりを有する3・4がⅡ2期（7世紀第4四半期）に比定でき、今回の出土遺物中で最古段階の資料となる。また新相を示す資料としては、杯蓋の28～33、有台杯の52・53、碗・皿類などがある。これらは概ねV2期～VI1期（9世紀後半代）の範疇で理解できるものと考えたが、矮小化した高台を有する124の碗は10世紀代まで降る可能性が高い。



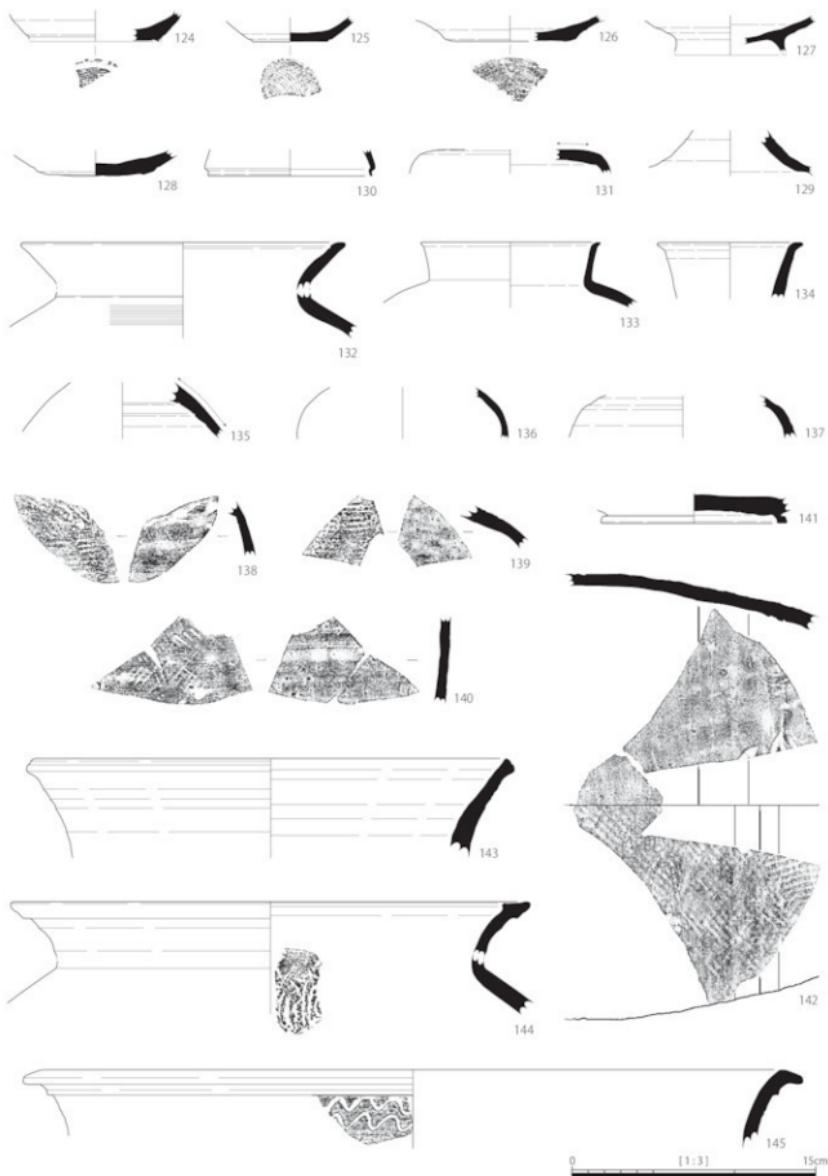
第11図 遺物実測図（1）SP01出土遺物、須恵器（縮尺1/3）



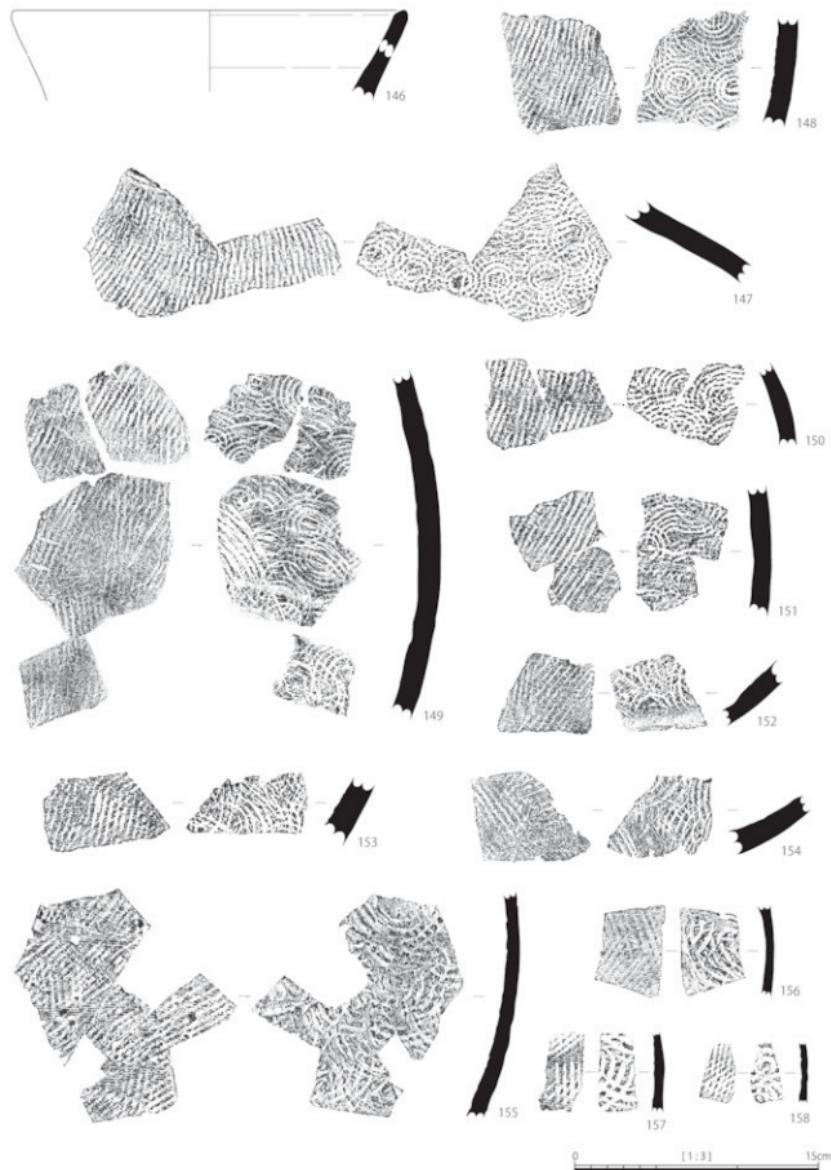
第12図 遺物実測図（2）須恵器（縮尺1/3）



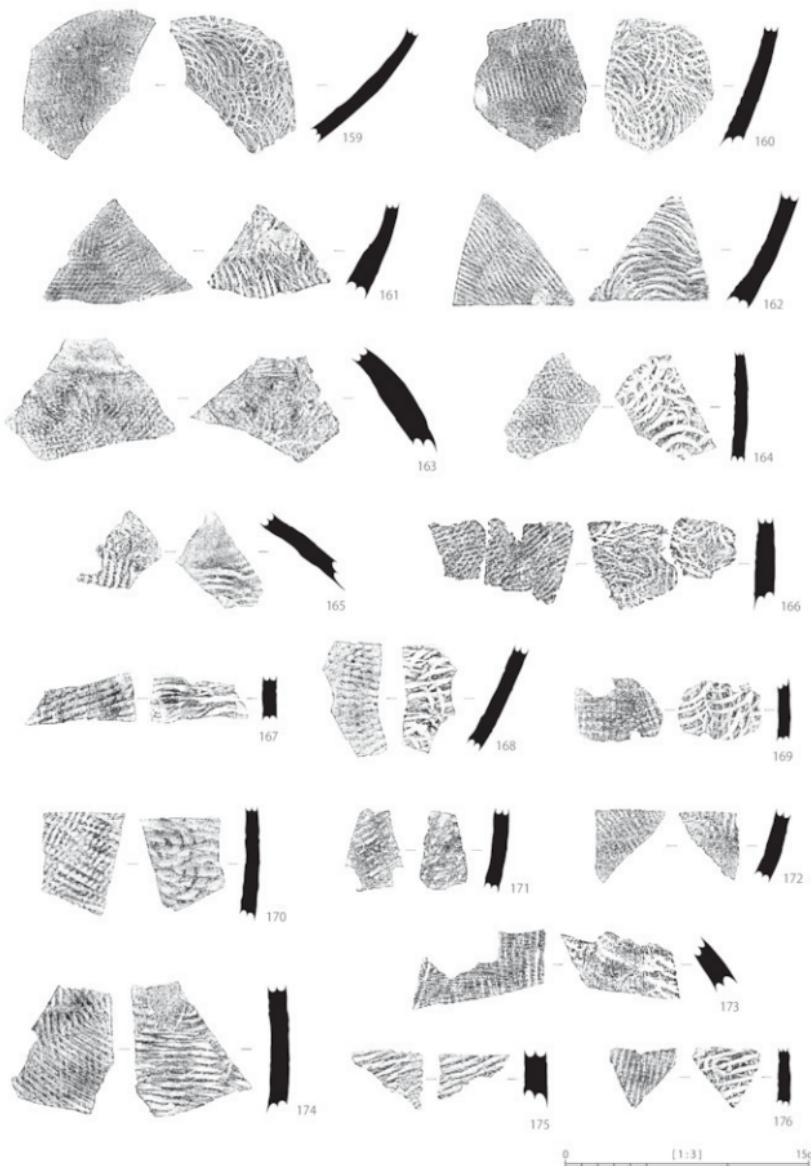
第13図 遺物実測図（3）須恵器〔縮尺1/3〕



第14図 遺物実測図（4）須恵器



第15図 遺物実測図（5）須恵器〔縮尺1/3〕



第16図 遺物実測図（6）須恵器 [縮尺1/3]

b. 土師器（第17～18図）

土師器は、碗・小型甕・甕・鍋が出土しているが、その大部分は甕類の体部片であり、供膳具類は極めて少ない。碗 177～187 は碗である。177～182 は口縁部で、口径は 9.0～20.0cm と幅がある。183 は体部で、内外面に赤彩を施す。184～187 は底部で、184～186 では外底面にかろうじて回転糸切り痕が確認できる。今回出土した土師器碗は全形を窺えるものはないが、いずれも回転糸切り未調整の碗と推定される。

小型甕 188～201 は小型甕である。なお、ここでは甕類のうち口径 20cm 未満のものを小型甕として分離した。188～196 は口縁部で、非轆轤成形によって端部を丸くおさめるもの（188・189）、轆轤成形で端部を面取りして方形に近く仕上げるもの（190～192）・端部を上方に引き上げるもの（193・194）・引き上げた端部を内側に屈曲させるもの（195）・端部を内側に巻き込むもの（196）などがあるが、区分は漸移的である。197～201 は底部で、197～200 では外面に笠削りを施す。201 は被熱による赤化が認められる。

甕鍋類 202～234 は甕鍋類である。全体の器形を窺える資料がなく甕・鍋の区別が付きにくいため、ここでは便宜的に口径 30cm 未満を甕、それ以上を甕ないし鍋として記述する。

202～213 は甕の口縁部で、いずれも轆轤成形によるものである。外端に面を取って上端を丸くおさめるもの（202）、端部を面取りして方形に近く仕上げ内端を上方に引き上げるもの（203～208）・引き上げた端部を内側に屈曲させるもの（209～211）・端部を内側に巻き込むもの（212）、薄く引き上げた端部を外側に折り返すもの（213）などがある。202 は頸部より下位の形態が判明する唯一の個体で、体部が張る器形となる。体部内外面に搔き目を施し、外面には煤が付着する。206・207・210 では口縁部内面に幅広の搔き目が確認できる。

214～218 は甕ないし鍋の口縁部である。いずれも轆轤成形で端部を断面方形に仕上げ、215～218 では面取りが強く明確な稜をもつ。214・215 では頸部内面、217 は口縁部内面に搔き目を施している。

219～234 は体部である。一部に小型甕を含んでいる可能性がある。内外面ともに刷毛目を施すもの（219・220）、外面撫で・内面刷毛目となるもの（221）、内外面ともに搔き目を施すもの（222～225）、外面に搔き目及び平行線文叩き目を施した後に笠削りを施すもの（226）、外面に笠削りを施し内面に撫でないし刷毛目を施すもの（227～230）、外面に平行線文叩き目を施すもの（231～234）などがある。このうち 222・225・226 は同一個体で、体部上半に搔き目、下半に平行線文叩き目を施し、その境界付近を中心として縱位の笠削りを施すもの。

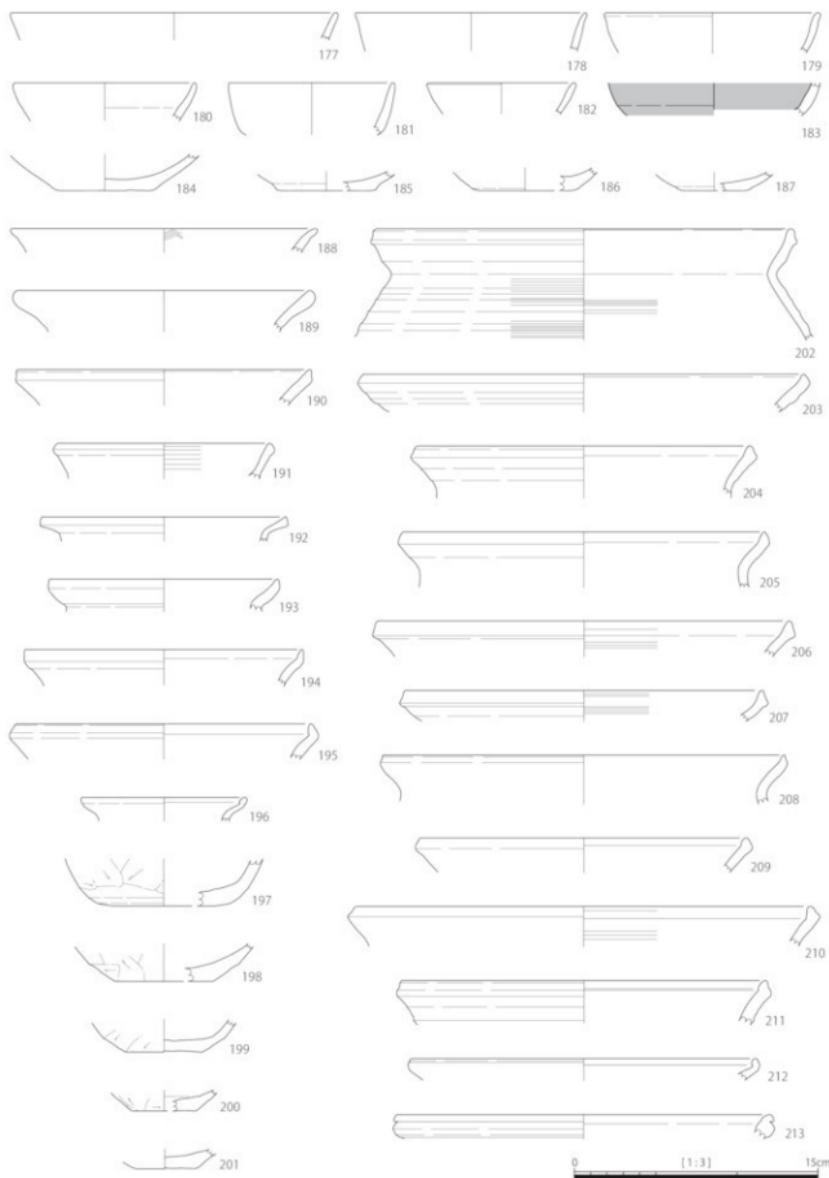
土師器の年代 以上に述べてきた土師器の詳細な年代については、全形が窺える資料が皆無であることから不明な点が多い。ただし、今回出土した土師器の大半を占める轆轤成形の甕類については、前述した須恵器同様田嶋編年Ⅲ期以降（8世紀中葉以降）のものとして大過ないものと判断した。また、非轆轤製の小型甕（188・189）及び甕（219～221）は須恵器の古い一群（7世紀第4四半期）に、回転糸切り未調整と推定される甕類は新しい一群（9世紀後半代）に対応させることができであろう。

c. 土製品（第18図）

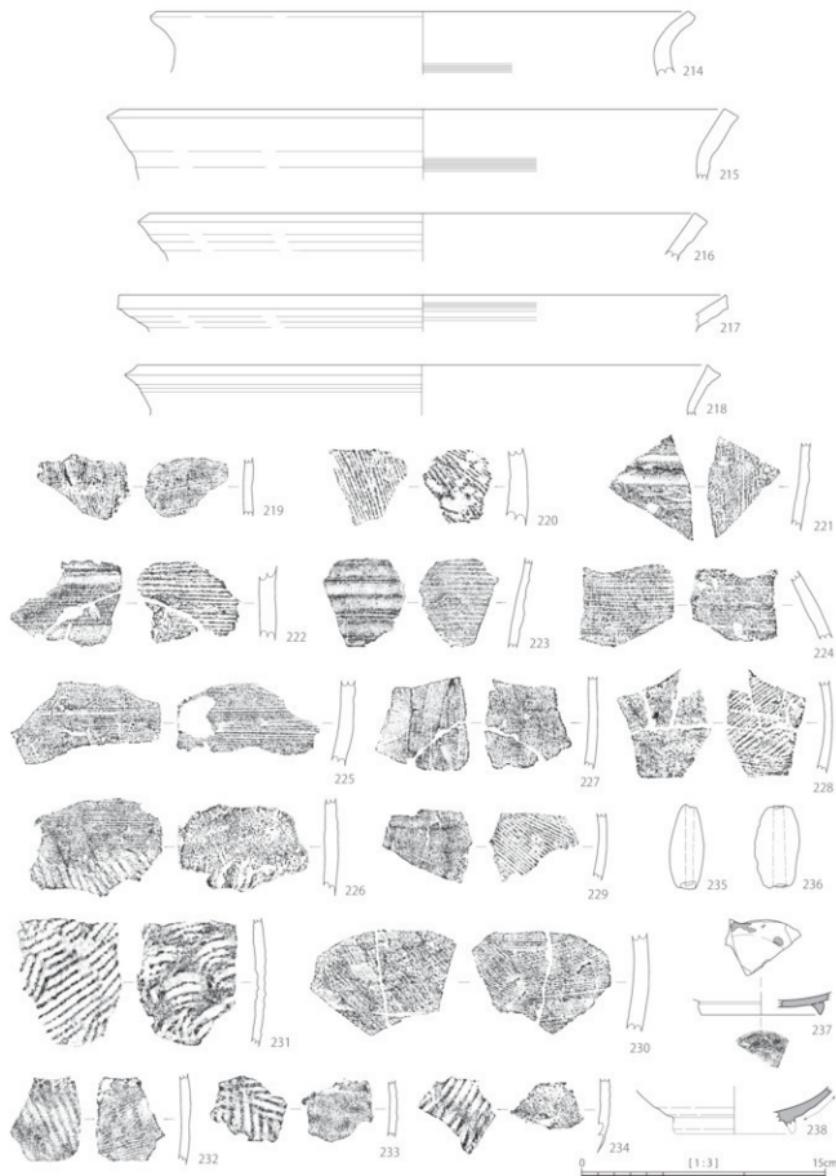
土製品としては、土錘が 2 点出土している。235・236 ともに樽型を呈する管状土錘である。

d. 灰釉陶器（第18図）

灰釉陶器は、碗ないし皿の底部片が 2 点出土している。237 は肉厚で背の低い三日月高台を有する。内面見込み部には重ね焼き時の高台痕が円環状に残り、また部分的に灰釉が付着している。見込み中央部は摩滅により滑らかくなっている。外底面には回転糸切り痕がうっすらと確認できる。238 は高台の大部分が欠失しているが、三日月高台を有するものと推測される。体部外面下半部には顕著な回転笠削り痕が残る。遺存部分では内外面ともに釉は確認できない。いずれも小片で判然としないが、猿投窯黒窯 90 号窯期（9世紀後半）のものと考えておきたい。



第17図 遺物実測図（7）土師器 [縮尺1/3]



第18図 遺物実測図（8）土師器・土製品・灰釉陶器（縮尺1/3）

第2表 遺物観察表(1)

番号	地区・層位	種別	器種	法量(cm)			調整	色調		胎土	焼成	備考
				口径	最高	深度		外/平行線引き目 内/網目	内面	外		
1	5区SP01 6区3層	土師器	甕					10YR7/3	10YR8/3	褐, 鮮小白・黒, 黑色粒含む	良好	
2	5区SP01	土師器	甕					10YR8/3	10YR8/4	褐, 白・赤色粒含む	良好	外面部着色
3	6区2層 試51-3層 表層	須恵器	杯蓋	18.6			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	SYT/1	N7/0	褐, 鮮小白色と少量含む	良好	内面かえりあり
4	4区4層	須恵器	杯蓋	13.0			外/回転擦で・内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐, 鮮小白色と少量含む	良好	内面かえりあり
5	5区3層 6区4層	須恵器	杯蓋	19.6			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	SYT/1	SYT/1	褐, 白色と多く含む	やや不良	
6	5区3層 6区4層	須恵器	杯蓋	19.6			外/回転擦で・内/回転擦で	7.5YT/1	7.5YT/1	褐, 白色多く含む	やや不良	
7	4区3層 試47視乱 表層	須恵器	杯蓋	15.6	12.8		外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	SY6/1	N7/0	褐, 鮮小白色と少量含む	良好	外面部灰 重ね焼き痕あり
8	4区3層 5区3層	須恵器	杯蓋	15.0	13.0		外/回転擦で 内/回転擦で・擦	10Y7/1	10Y7/1	褐, 鮮小白色含む	良好	断面中央部赤褐色
9	6区3-4層	須恵器	杯蓋	15.6			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 白・黒色多く含む	良好	
10	5区4層	須恵器	杯蓋	16.4			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	7.5YT/1	7.5YT/1	褐, 鮮小白色と少量含む	良好	重ね焼き痕あり
11	3区3層	須恵器	杯蓋	19.2			外/回転擦で・内/回転擦で	2.5SY/2	2.5SY/2	褐, 白・黒色粒含む	良好	
12	3区3層	須恵器	杯蓋	15.6			外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 鮮小白色含む	良好	
13	6区5-7層	須恵器	杯蓋	19.6			外/回転擦で・内/回転擦で	7.5Y6/1	SY5/1	褐, 鮮小白色と少量含む	良好	外面部灰
14	4区3層	須恵器	杯蓋	15.4			外/回転擦で・内/回転擦で	SY6/1	N7/0	褐, 白・黒色少々含む	良好	外面部灰
15	6区3層	須恵器	杯蓋	17.0			外/回転擦で・内/回転擦で	7.5Y6/1	N6/0	褐, 鮮小白色含む	良好	
16	6区3層	須恵器	杯蓋	15.2			外/回転擦で・内/回転擦で	7.5YT/1	7.5YT/1	褐, 鮮白・黒色少々含む	良好	
17	6区3層	須恵器	杯蓋	12.8	3.0		外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	SY8/1	SY8/1	褐, 鮮小白・黒色少々含む	不良	
18	6区3-4層	須恵器	杯蓋	12.4			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	2.5GY7/1	2.5GY7/1	褐, 白・黒色多く含む	良好	重ね焼き痕あり
19	5区3層 7区1層	須恵器	杯蓋	12.2			外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐, 白・黒色含む	良好	
20	4区2層	須恵器	杯蓋	11.4			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐, 白色和・幾黑色粒多く含む	良好	外面部灰
21	4区3層	須恵器	杯蓋	13.3			外/回転擦で・内/回転擦で	SY6/1	SY6/1	褐, 白色和・幾黑色粒多く含む	良好	
22	吉坪	須恵器	杯蓋	16.8			外/回転擦で・内/回転擦で	SY6/1	SYT/1	褐, 白色少々含む	良好	
23	2区2層	須恵器	杯蓋	14.4			外/回転擦で・内/回転擦で	7.5YT/1	7.5YT/1	褐, 白・黒色少々含む	やや不良	
24	地区5-1層	須恵器	杯蓋	15.8			外/回転擦で・内/回転擦で	SY6/1	SY7/1	褐, 白・黒色少々含む	不良	
25	5区3-4層	須恵器	杯蓋	13.0			外/回転擦で・回転擦削り	7.5Y6/1	10YK7/2	褐, 純白, 白色多く含む	良好	
26	吉坪	須恵器	杯蓋	12.4			外/回転擦で・内/回転擦で	SY6/1	SY6/1	褐, 鮮小白・黒色少々含む	良好	内部隕灰
27	6区3層	須恵器	杯蓋	13.0			外/回転擦で・内/回転擦で	SY7/1	SY7/1	褐, 鮮白・黒色少々含む	良好	
28	6区3-4層	須恵器	杯蓋	11.2			外/回転擦で・回転擦切口擦で	N6/0	N6/0	褐, 大型の白・黒色含む	良好	斑点みあり
29	試513層	須恵器	杯蓋	12.0			外/回転擦で・回転擦切口擦で	N6/0	N6/0	褐, 白色和含む	良好	重ね焼き痕あり
30	地区5-1層	須恵器	杯蓋	10.2			外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	7.5Y6/1	7.5Y6/1	褐, 鮮小白・黒色含む	良好	重ね焼き痕あり
31	5区3層	須恵器	杯蓋	13.6			外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 鮮小白色含む	良好	
32	5区4層	須恵器	杯蓋	12.7			外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 鮮小白・黒色少々含む	良好	
33	5区3層	須恵器	杯蓋	13.8			外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 鮮小白色含む	良好	
34	6区4層	須恵器	杯蓋	3.2	0.7	串罈	外/回転擦で・回転擦切口擦で	N7/0	N7/0	褐, 白色和含む	良好	
35	4区2層	須恵器	杯蓋	2.4	1.1	串罈	外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐, 鮮・白・黒色含む	良好	内部黒斑・斑点みあり
36	5区3層 6区3-4層	須恵器	杯蓋				外/回転擦で・回転擦削り 内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐, 白・黒色含む	良好	
37	5区3層	須恵器	杯蓋				外/回転擦で・擦で 内/回転擦で	N7/0	N7/0	半黒, 白色多く含む	良好	
38	5区3層	須恵器	杯蓋				外/擦で?・内/回転擦で・擦で	10Y8/1	10YR8/1	褐, 鮮・白・黒色含む	不良	内部黒斑記号「十」
39	表深	須恵器	杯蓋?				外/回転擦削り?・内/回転擦で	SY6/1	SY6/1	非常に黒斑, 鮮小白・黒色和 含む	極めて 良好	
40	7区2層	須恵器	杯蓋	3.4	0.9	串罈	外/回転擦で・内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐, 白色和含む	良好	
41	地区5-1層	須恵器	杯蓋	2.6	1.1	串罈	外/回転擦で・内/回転擦で	7.5Y6/1	7.5Y6/1	褐, 鮮・白・黒色含む	良好	断面赤褐色
42	5区2層	須恵器	杯蓋	2.4	0.6	串罈	外/回転擦で・内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐, 鮮小白・黒色和含む	良好	
43	4区3層 4区規定	須恵器	有台杯	13.4	4.1	9.6	外/回転擦で・底部鋸切切り後擦で	N3/0	N7/0	褐, 純白, 白色和含む	良好	外面部灰
44	6区3層	須恵器	有台杯	(13.0)	14.0	9.4	外/回転擦で, 底部鋸切切り後擦で	7.5Y6/1	7.5Y7/1	褐, 白色和多く含む	やや不良	
45	3区2層	須恵器	有台杯	13.6	3.3	9.0	外/回転擦で, 底部擦で	2.5Y8/2	2.5Y8/2	褐, 白色和含む	不良	
46	5区3層 6区3-4層	須恵器	有台杯	14.8	6.5	9.2	外/回転擦で, 底部鋸切切り後擦で 内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐, 純白, 鮮小白色多く含む	良好	外面部灰 口縁部に油付着
47	3区3層 試513層 地区5-1層	須恵器	有台杯	13.8	6.5	8.8	外/回転擦で, 底部鋸切切り後擦で 内/回転擦で	7.5Y6/1	7.5Y7/1	褐, 鮮小白・黒色含む	良好	高台表面に板起こし 模様あり
48	5区2層 5区3層 表層	須恵器	有台杯	10.8	3.2	8.0	外/回転擦で・内/回転擦で	7.5Y7/1	SY7/1	非常に堅緻, 褐・黒色和含む	極めて 良好	高台断面二角形
49	3区3層 表層	須恵器	有台杯	10.4	3.8	7.0	外/回転擦で, 底部鋸切切り後擦で 内/回転擦で	10YR5/5	10YR5/5	褐, 純白, 白色和多く含む	良好	断面赤褐色
50	6区4層	須恵器	有台杯	10.2	3.3	7.2	外/回転擦で, 底部鋸切切り後擦で 内/回転擦で	2.5Y7/2	2.5Y7/2	褐, 鮮小白・黒色含む	不良	高台頂付打痕い

第3表 遺物観察表 (2)

番号	地区・層位	種別	器種	法量(cm)			調整	色調		衛土	現成	備考
				口径	周囲	底径		外面	内面			
51	6区3・4層	酒樽器	有台杯	12.0	4.1	7.2	外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N6/0	N6/0	黒・白色料多く含む	良好	
52	3区3層 5区3層 6区3層 地区外1層	酒樽器	有台杯	10.6	4.1	6.6	外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N7/0	N7/0	黒・微小白色料含む	良好	
53	5区3層 6区3層 表様	酒樽器	有台杯	10.8	4.5	6.8	外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で+撫で	N7/0	N7/0	黒・黑色料・微小白色料含む	良好	
54	6区3・4層	酒樽器	有台杯		9.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N6/0	N7/0	黒・白色料多く含む	良好	内部隕灰 見込み消耗
55	5区3層	酒樽器	有台杯		10.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で+撫で	N6/0	7.5Y6/1	黒・褐斑、微小白色料含む	良好	
56	4区2層	酒樽器	有台杯		10.2		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y6/1	7.5Y6/1	黒・黑色料・微小白色料含む	良好	内部隕灰
57	3区3層	酒樽器	有台杯		9.4		外/回転盤で、内/回転盤で	7.5Y8/1	7.5Y8/2	黒・白色料含む	不良	
58	6区3層	酒樽器	有台杯		9.0		外/回転盤で、底部鋸で	N7/0	N6/0	黒・黒小・黑色料少額含む	良好	断面隕灰色
59	表様	酒樽器	有台杯		9.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	5Y6/1	5Y7/1	黒・微小白色料少額含む	良好	
60	地区外1層	酒樽器	有台杯		9.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で+撫で			黒・黑色料・微小白色料含む	良好	
61	6区4層	酒樽器	有台杯		8.6		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	5Y6/2	2.5Y7/2	黒・黒小・黑色料多く含む	良好	外部全体に自然釉跡 から
62	6区3層	酒樽器	有台杯		8.4		外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で+撫で	N5/0	N6/0	黒・褐斑、微小白色料多く含む	良好	断面赤褐色、高台端部に板起し痕あり
63	1区2層	酒樽器	有台杯		8.0		外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で	10Y6/1	10Y7/1	黒・白・黒色料含む	良好	
64	6区2層	酒樽器	有台杯		7.6		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	5Y5/1	5Y5/1	やや白・白色料多く含む	良好	断面一部赤褐色
65	2区1層 3区3層 表様	酒樽器	有台杯		7.0		外/回転盤で 内/回転盤で	5Y6/1	5Y7/1	褐斑、微小白・黑色料含む	良好	高台断面三角形
66	6区3層	酒樽器	有台杯		6.0		外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で+撫で	10Y7/1	10Y7/1	黒・微小白色料含む	良好	
67	4区2層	酒樽器	有台杯		7.0		外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で	7.5Y7/1	7.5Y7/1	黒・白・黒・赤色料含む	良好	
68	6区4層	酒樽器	有台杯		7.2		外/回転盤で、底部回転盤切り 内/回転盤で	5Y6/1	7.5Y7/1	黒・白色料含む	良好	高台端面凹凸
69	5区3層	酒樽器	有台杯		7.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N6/0	2.5Y7/2	黒・黒小・黑色料多く含む	良好	
70	5区3層	酒樽器	有台杯		7.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で+撫で	N6/0	N6/0	黒・微小白色料含む	良好	断面一部赤褐色
71	試2T1層	酒樽器	無台杯	(14.2) (0.1)	8.6		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y7/1	7.5Y7/1	黒・白色料含む	やや不良	
72	3区3層	酒樽器	無台杯	13.8	3.3	8.0	外/回転盤で、底部回転盤切り 内/回転盤で	2.5Y8/6	2.5Y8/4	黒・微小白色料含む	不良	
73	3区3層	酒樽器	無台杯	(13.2) (0.2)	9.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	2.5GY6/4	2.5GY6/1	黒・微小白色料含む	良好	
74	4区2層	酒樽器	無台杯	(12.4) (0.1)	9.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	2.5Y8/2	2.5Y7/1	黒・白色料含む	不良	
75	6区4層	酒樽器	無台杯	12.2	3.8	9.2	外/回転盤で、底部回転盤切り 内/回転盤で	10Y7/3	10Y7/2	黒・微小白色料含む	やや不良	重ね焼き痕あり
76	3区4層	酒樽器	無台杯	12.2	3.5	8.0	外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	2.5Y7/1	2.5Y7/1	黒・白色料含む	やや不良	
77	試5T3層	酒樽器	無台杯	10.8	2.9	6.8	外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で	5Y7/1	2.5Y7/2	黒・微小白色料含む	良好	
78	4区3層 5区3層 試5T3層	酒樽器	無台杯	10.8	3.2	7.8	外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y6/1	7.5Y6/1	黒・白色料含む	良好	
79	6区4層	酒樽器	無台杯		9.8		外/回転盤で、底部回転盤切り 内/回転盤で	2.5Y7/2	2.5Y6/2	黒・微小白色料少額含む	やや不良	
80	5区3層	酒樽器	無台杯		7.0		外/回転盤で、底部回転盤切り 内/回転盤で+撫で	5Y7/1	5Y7/1	黒・褐斑、微白色料多く含む	良好	
81	5区3層	酒樽器	無台杯		11.2		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で	5Y6/1	7.5Y7/1	黒・褐斑、微小白色料含む	良好	
82	5区3層	酒樽器	無台杯		8.4		外/不規・内/不規	5Y8/2	5Y8/2	黒・黒小・黑色料含む	不良	摩滅
83	試2T2層	酒樽器	無台杯		8.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y7/1	7.5Y6/1	黒・黒小・黑色料含む	良好	辺込み部焼き跡
84	6区4層	酒樽器	無台杯		8.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N6/0	N7/0	黒・微小白色料含む	良好	
85	6区3層	酒樽器	無台杯		8.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y7/1	7.5Y7/1	黒・白色料少額含む	良好	見込み中央部薄い
86	1区5層	酒樽器	無台杯		8.4		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y6/1	7.5Y6/1	黒・褐斑、微小白色料含む	良好	
87	4区3層	酒樽器	無台杯		8.0		外/回転盤で、底部鋸で 内/回転盤で	7.5Y6/1	7.5Y5/1	黒・褐斑、微小白色料含む	やや不良	
88	4区2層	酒樽器	無台杯		9.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	2.5Y8/1	2.5Y8/1	黒・白色料少額含む	不良	
89	6区4層	酒樽器	無台杯		7.8		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	N6/0	N6/0	黒・褐斑、白・黑色料多く含む	良好	表面に2~5mm大の黒斑多数
90	5区3層	酒樽器	無台杯		7.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	5Y8/1	5Y8/1	黒・白・黒・赤色料含む	不良	
91	6区3層	酒樽器	無台杯		8.0		外/回転盤で、底部鋸切り後撫で 内/回転盤で	7.5Y7/1	7.5Y7/1	黒・黒小色料多く含む	やや不良	

第4表 遺物観察表(3)

番号	地区・層位	種別	器種	法量(cm)		調整	色調		胎土	焼成	備考
				口径	部品		外	内			
92	試 ST3 層	須恵器	無台杯		6.8	外/回転擦で、底部鋸切り後擦で	N7/0	N7/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
93	3区3層	須恵器	無台杯		6.0	外/回転擦で、底部鋸切り後擦で	7.5Y7/1	7.5Y7/1	褐・褐斑・微小白・黒色粒多く含む	やや不良	
94	5区3層	須恵器	杯	18.2		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y7/1	5Y7/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
95	6区3層	須恵器	杯	17.8		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5W6/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
96	5区3層	須恵器	杯	17.4		外/回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐・微小白粒少々含む	良好	
97	4区3層	須恵器	杯	16.2		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5Y8/2	SY8/2	褐・微小白・黒色粒含む	不良	
98	6区4層	須恵器	杯	14.8		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5Y7/1	褐・微小白・黒色粒含む	やや不良	
99	5区3層	須恵器	杯	15.0		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5Y7/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
100	5区3層	須恵器	杯	15.0		外/回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N7/0	褐・白・黒色粒少々含む	良好	
101	6区3層	須恵器	杯	15.0		外/回転擦で 内/回転擦で	N5/0	N6/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
102	4区3層	須恵器	杯	14.0		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5Y7/1	褐・微小白粒含む	良好	
103	5区3層	須恵器	杯	13.6		外/回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N7/0	白・褐色少々含む	良好	体部外側に斑紋
104	4区3層	須恵器	杯	13.0		外/回転擦で 内/回転擦で	N5/0	N6/0	褐・白・黒色粒含む	良好	
105	1区5層	須恵器	杯	13.0		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y6/1	5Y7/1	原褐色・微小白・黒色粒含む	極めて良好	
106	6区4層	須恵器	杯	12.6		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5YS/1	7.5Y7/1	褐・白・黒色粒含む	良好	体部外側面記印(+)
107	5区4層	須恵器	杯	12.6		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y6/1	5Y7/1	褐・白・黒色粒含む	不良	
108	5区3層	須恵器	杯	12.6		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y7/1	5Y7/1	褐・白・黒色粒多く含む	やや不良	
109	6区4層	須恵器	杯	12.6		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5G6/1	2.5GY7/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	重ね焼き痕あり
110	6区3層	須恵器	杯	12.2		外/回転擦で 内/回転擦で	N5/0	N6/0	褐斑・微小白・赤色粒含む	良好	断面一部赤褐色
111	6区3層	須恵器	杯	12.6		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y5/5	5Y5/5	白・褐色少々含む	良好	
112	6区4層	須恵器	杯	12.0		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5Y5/1	7.5S5/1	褐・微小白・白色粒含む	良好	断面赤褐色
113	試 4T2 層	須恵器	杯	12.0		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5Y7/1	褐・白・褐色少々含む	良好	
114	5区4層	須恵器	杯	12.0		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y7/1	7.5Y7/1	褐・微小白・白色粒含む	良好	
115	表深	須恵器	杯	12.0		外/回転擦で 内/回転擦で	N7/0	7.5Y7/1	褐・白・黒色粒含む	やや不良	
116	4区3層	須恵器	杯	11.8		外/回転擦で 内/回転擦で	N3/0	N6/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
117	6区3層	須恵器	杯	11.4		外/回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N6/0	褐・白・黒色粒含む	良好	重ね焼き痕あり
118	3区4層	須恵器	杯	10.8		外/回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N6/0	白・褐色少々含む	良好	
119	4区3層	須恵器	杯	10.8		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5W6/1	7.5W6/1	褐・白・黑色粒含む	良好	内外部暗灰
120	3区3層	須恵器	杯	10.4		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5G6/1	2.5GY6/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
121	6区4層	須恵器	杯	8.6		外/回転擦で 内/回転擦で	10Y8/1	N6/0	褐・白・黒色粒含む	良好	
122	4区3層	須恵器	杯	8.6		外/回転擦で 内/回転擦で	10Y8/1	N6/0	褐・白・黒色粒含む	良好	
123	表深	須恵器	杯?			外/回転擦で 内/回転擦で	5Y7/1	5Y8/1	翠斑・微小白・黒色粒含む	極めて良好	
124	1区1層	須恵器	闕		8.0	外/回転擦で、底部回転板切り 内/回転擦で	2.5G6/1	2.5GY6/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	低い台面あり
125	表深	須恵器	闕		4.6	外/回転擦で、底部回転板切り 内/回転擦で?	7.5Y6/1	7.5Y6/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
126	表深	須恵器	闕		8.0	外/回転擦で、底部回転板切り 内/回転擦で	2.5G6/1	2.5GY6/1	褐・微小白・黒色粒多く含む	良好	底端部擦で?
127	試 ST3 層	須恵器	闕		6.6	外/回転擦で、底部擦で	2.5G6/1	2.5GY6/1	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
128	4区4層	須恵器	闕?		7.0	外/回転擦で、底部鋸切り後擦で 内/回転擦で	7.5Y8/1	7.5Y8/1	褐・微小白・白色粒含む	不良	
129	地区外1層	須恵器	高杯			外/回転擦で 内/回転擦で	N4/0	N5/0	白・褐色少々含む	良好	脚脚片
130	4区2層	須恵器	蓋?	10.0		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y7/1	5Y8/1	褐・翠斑・微小白・黒色粒多く含む	良好	
131	3区3層	須恵器	蓋?		11.0	外/回転擦で、頂部回転板切り 内/回転擦で	7.5Y7/1	N7/0	白・褐色少々含む	良好	
132	4区2層	須恵器	蓋	20.0		外/回転擦で、縫合跡 内/回転擦で	2.5Y7/1	2.5Y7/1	半白・白・白色粒含む	不良	部分的にろっさると赤みを帯びる
133	6区4層	須恵器	蓋	11.0		外/回転擦で 内/回転擦で	7.5Y7/1	7.5Y6/1	褐・微小白・白色粒含む	良好	外観・口縁部内部暗灰
134	5区3層	須恵器	蓋/瓶	9.0		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5G5/1	2.5GY6/1	褐・白色・微小黒色粒多く含む	良好	
135	7区3層	須恵器	蓋/瓶			外/回転擦切り・擦で 内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	内部周縁に7mm大の小穴1点有り
136	6区4層	須恵器	蓋/瓶			外/回転擦で 内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
137	6区3層	須恵器	蓋/瓶			外/回転擦で 内/回転擦で	5Y5/1	5Y6/1	褐・微小白・白色粒含む	良好	外観暗灰
138	6区3層	須恵器	蓋/瓶			外/平縁文引き目・回転擦で 内/回転擦で	N7/0	N6/0	半白・褐色少々含む	極めて良好	
139	6区3層	須恵器	蓋/瓶			外/平縁文引き目・回転擦で 内/回転擦で	SY4/1	N6/0	半白・褐色少々含む	極めて良好	外観暗灰
140	6区3・4層	須恵器	蓋/瓶			外/平縁文引き目・回転擦で 内/回転擦で	N6/0	N6/0	半白・褐色少々含む	極めて良好	
141	3区3層	須恵器	蓋/瓶		11.4	外/回転擦で、底部鋸切り後擦で 内/回転擦で	N7/0	N7/0	褐・微小白・黒色粒含む	良好	
142	6区3層	須恵器	楕瓶			外/平縁文引き目・回転擦で 内/回転擦で、側面内文引き目	N6/0	N7/0	褐・翠斑・白・黒色粒含む	良好	
143	1区4層	須恵器	蓋	25.0		外/回転擦で 内/回転擦で	2.5G5/1	2.5GY5/1	褐・微小白・白色粒含む	良好	
144	地区外1層	須恵器	蓋	32.0		外/回転擦で 内/回転擦で、側面内文引き目	N7/0	N5/0	褐・微小白・白色粒多く含む	良好	隣接・脚脚部にヘラ擦き痕伏状
145	1区3層	須恵器	蓋	48.0		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y5/1	5Y7/1	褐・微小白・白色粒多く含む	良好	
146	4区3・4層	須恵器	蓋	24.0		外/回転擦で 内/回転擦で	5Y6/1	5Y7/1	半白・白・褐色少々含む	やや不良	外観に白色粒が長い青緑色に異色

第5表 遺物観察表（4）

番号	地区・層位	種別	品種	法量(cm)		調査	色調		胎土	焼成	備考
				口径	高さ		外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	SY7/1	SY7/1		
147	3区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	SY7/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
148	5区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	SY7/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
149	2区a層 3区3層 4区4層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	SY7/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
150	5区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	SY6/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	表面白色粒が浅い 赤褐色に見色
151	6区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目+ 擦で	SY6/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	表面白色粒が浅い 赤褐色に見色
152	試 ST3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	SY7/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
153	3区4層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目+ 擦で	SY6/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
154	3区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目+ 擦で	SY7/1	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	やや不良	
155	5区3層 6区2~4層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/2	2.5SY1/1	密、縦状、白・黒色粒含む	良好	
156	5区4層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	7.5SY2/2	5SY6/1	密、縦状、白・黒色粒含む	良好	表面自然輪
157	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/2	2.5SY1/1	密、縦状、白・黒色粒含む	良好	
158	3区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/2	5SY1/1	密、白・黒色粒含む	良好	
159	3区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で	7.5SY1/1	5SY1/1	密、微小白色粒含む	良好	
160	試 ST3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で	7.5SY1/1	5SY1/1	密、微小白色粒含む	良好	
161	5区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/1	5SY6/1	密、縦状、白色粒含む	良好	やや未蘊元状態
162	試 ST3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 握き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/1	5SY6/1	密、縦状、白色粒含む	良好	やや未蘊元状態
163	試 ST3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で 内/同心円文印き目+ 擦で	7.5SY1/2	7.5SY1/2	密、縦状、白・黒色粒含む	良好	外銀印き目は複数子 状
164	5区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で 内/同心円文印き目+ 擦で	7.5SY1/2	7.5SY1/2	密、縦状、白・黒色粒含む	良好	外銀印き目は複数子 状
165	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	2.5SY1/1	SY7/1	密、縦状、白色粒少量含む	良好	
166	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	N3/0	5SY6/1	密、白色粒含む	良好	
167	3区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	7.5SY1/1	7.5SY1/1	密、白・黒色粒含む	良好	
168	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	5SY6/1	7.5SY1/1	密、微小白・黒色粒含む	良好	
169	試 ST3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で 内/同心円文印き目	SY7/3	SY7/1	やや粗、白色粒多く含む	不良	
170	5区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	7.5SY4/1	N5/0	密、縦状、微小白色粒多く含む	良好	断面赤褐色
171	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	5SY6/1	7.5SY1/2	密、微小白色粒多く含む	良好	
172	6区4層	須恵器	廣			外/平行線文印き目+ 擦で 内/同心円文印き目+ 擦で	N7/0	5SY6/1	密、微小白・黒色粒含む	良好	内部印き目は平行線 文の可能性
173	6区3層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目+ 紋毛足で	N6/0	N7/0	暗、薄肉、微小白・黒色粒含む	良好	断面中心部暗灰色
174	2区a層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目+ 平行線文印き目+ 紋毛足	N2/0	2.5SY6/1	密、縦状、白・黒色粒多く含む	良好	内部複数種の印跡 あり
175	地区P1層	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目	7.5SY1/2	7.5SY1/1	密、縦状、微小白色粒多く含む	やや不良	断面赤褐色
176	表探	須恵器	廣			外/平行線文印き目 内/同心円文印き目+ 同心円印記 2目	7.5SY4/1	N6/0	密、微小白色粒少量含む	良好	内壁複数種の印跡 あり
177	6区2層	土師器	網	200		外/回転輪で 内/回転輪で	2.5SY1/2	2.5SY1/2	白・赤色着色	良好	
178	6区3層	土師器	網	140		外/回転輪で 内/回転輪で	5SY6/2	10SY7/3	白・赤色着色	良好	外壁少々笠輪状
179	7区2層	土師器	網	130		外/回転輪で 内/回転輪で	10SY8/2	10SY8/4	白・微小白色粒少量含む	良好	内壁赤褐色
180	試 ST3層	土師器	網	110		外/回転輪で 内/回転輪で	2.5SY1/2	2.5SY1/1	微・白色粒少量含む	良好	中・小・濃元状態
181	5区3層	土師器	網	100		外/回転輪で 内/回転輪で	2.5SY2/2	2.5SY2/2	微・白色粒少量含む	良好	
182	5区3層	土師器	網	90		外/回転輪で 内/回転輪で	2.5SY4/4	2.5SY4/4	微・白色粒少量含む	やや不良	
183	5区4層	土師器	網			外/回転輪で 内/回転輪で	2.5SY6/1	2.5SY6/1	白・白色粒含む	良好	内外表赤
184	5区3層 6区3層	土師器	網	60		外/回転輪で 裁断面回転輪切り	10SY8/4	7.5YK7/6	白・赤色粒含む	良好	
185	6区3層	土師器	網	60		外/回転輪で 裁断面回転輪切り	7.5YK7/4	10YK7/4	密、赤色粒多く含む	良好	摩滅
186	4区3層	土師器	網	60		外/回転輪で 裁断面回転輪切り	2.5SY1/3	2.5SY1/3	微・白色粒少量含む	良好	摩滅
187	6区3層	土師器	網?	40		外/回転輪で 内/回転輪で?	10SY8/4	10SY8/4	白・白色粒少量含む	やや不良	摩滅
188	4区3層	土師器	小字網	190		外/網で 内/網	2.5Y7/2	2.5Y7/2	白・赤色粒含む	良好	並列繩
189	4区1層	土師器	小字網	190		外/撫で 内/撫で	10SY8/3	10SY8/3	微・白色粒含む	良好	並列繩
190	試 ST3層	土師器	小字網			外/回転輪で 内/回転輪	2.5SY1/2	2.5SY1/2	微・白色粒含む	やや不良	
191	試 ST3層	土師器	小字網	130		外/回転輪で 内/回転輪?	10SY8/3	2.5SY8/3	白・白色粒含む	良好	摩滅
192	5区3層	土師器	小字網	150		外/回転輪で 内/回転輪	2.5SY8/3	2.5SY8/3	微・白色粒含む	良好	
193	5区3層	土師器	小字網	140		外/回転輪で 内/回転輪	3.0SY6/6	10YR8/3	白・白色粒多く含む	良好	
194	6区4層	土師器	小字網	170		外/回転輪で 内/回転輪	10SY8/3	10YR8/3	白・白色粒含む	良好	
195	6区4層	土師器	小字網	180		外/回転輪で 内/回転輪	2.5SY8/3	7.5SY8/4	白・白色粒含む	良好	

第6表 遺物觀察表(5)

番号	地区・層位	種別	器種	法量(cm)		調整	色調		胎土	構成	備考	
				口径	部品		外・内輪削で	内・外輪削で				
196	7区3層	土師器	小型甕	10.0			7.5Y7/4	10YR6/4	白・赤色粘合む	良好		
197	5区3層	土師器	小型甕		8.2		外・内輪削で・接削り	2.5Y7/3	2.5Y8/3	白・白色多く含む	良好	
198	5区3層	土師器	小型甕		6.0		外・削削り・内・擦で	2.5Y7/4	2.5Y7/3	白・黑色粘合む	良好	
199	6区3・4層	土師器	小型甕		4.7		外・削削り・内・擦で	10YR7/3	10YR8/3	白・白色多く含む	良好	
200	4区3層	土師器	小型甕		4.0		外・削削り・内・擦で	10YR7/3	10YR6/2	白・白色多く含む	良好	
201	試513層	土師器	小型甕		3.7		外・削削り・内・擦で?	2.5Y7/4	2.5Y7/5	白・白色多く含む	良好	摩損・被熱による変化?
202	6区3・4層	甕		25.6			外・内輪削で・接き目	2.5Y6/3	2.5Y7/3	白・白色・微小黑色粘合む	良好	側面部に保付着
203	6区頃	土師器	甕	27.0			外・内輪削で・内・外輪削で	2.5Y7/3	10YR7/3	白・白・黑色少部分む	良好	
204	6区3層	土師器	甕	20.4			外・内輪削で・内・外輪削で	10YR8/3	10YR8/3	白・白色粘合む	中や不良	外面部深部着
205	6区3層	土師器	甕	22.2			外・内輪削で・内・外輪削で	10YR7/3	10YR7/3	白・白色粘合む	良好	
206	6区4層	土師器	甕	25.2			外・内輪削で・接き目	10YR8/3	10YR8/3	白・白色粘合む	良好	
207	5区3層	土師器	甕	22.0			外・内輪削で	10YR8/3	2.5Y8/3	白・白色・微小黑色粘合む	中や不良	
208	6区3層	土師器	甕	24.6			外・内輪削で・内・外輪削で	10YR8/3	10YR8/3	白・赤色粘合む	中や不良	
209	3区3層	土師器	甕	20.0			外・内輪削で・内・外輪削で	2.5Y8/3	2.5Y8/3	白・白色粘合む	中や不良	
210	5区3層	土師器	甕	27.8			外・内輪削で・接き目	10YR8/4	10YR8/4	白・白色・微小黑色粘合む	中や不良	
211	6区4層	土師器	甕	22.6			外・内輪削で・内・外輪削で	2.5Y7/3	2.5Y7/3	白・白色・微小黑色粘合む	良好	
212	7区2層	土師器	甕	21.0			外・内輪削で・内・外輪削で	2.5Y8/3	2.5Y8/7	白・白色粘合む	中や不良	被熱による変化?
213	6区3層	土師器	甕	23.0			外・内輪削で・内・外輪削で	2.5Y8/3	2.5Y8/3	白・白色粘合む	中や不良	
214	5区3層	土師器	甕/瓶	32.6			外・内輪削で・接き目	10YR8/3	10YR8/3	白・微小白・黒・赤色粘合む	良好	外面一部保付着
215	5区3層	土師器	甕/瓶	38.0			外・内輪削で・接き目	7.5Y8/4	7.5Y8/4	小・粗・白色・微小赤色粘合	良好	
216	6区4層 試513層	土師器	甕/瓶	35.0			外・内輪削で・内・外輪削で	10YR8/4	10YR8/4	小・粗・白色・微小赤色粘合	良好	
217	4区3層	土師器	甕/瓶	38.0			外・内輪削で・接き目	10YR8/3	10YR8/3	白・微小白・赤色粘合む	良好	
218	6区3層	土師器	甕/瓶	35.0			外・内輪削で・内・外輪削で	7.5Y8/2	SYR6/6	小・粗・白色多く含む	良好	
219	3区3層	土師器	甕				外・刷毛目・内・刷毛目	10YR6/4	10YR7/3	小・粗・白色・微小赤色粘合	良好	外面一部保付着
220	試512層	土師器	甕				外・刷毛目・内・刷毛目	2.5Y7/3	10YR8/2	小・粗・白色・微小黑色粘合	良好	
221	5区3層	土師器	甕				外・刷毛目	2.5Y7/3	10YR8/2	小・粗・白色・微小白色粘合	良好	
222	試4T2・3層	土師器	甕				外・内輪削で・接き目	10YR8/3	10YR8/3	白・白色・微小赤色粘合多く含む	良好	内部一部保付着
223	6区4層	土師器	甕				外・内輪削で・接き目	10YR7/2	2.5Y8/2	白・白色・微小白色粘合	良好	外面一部保付着
224	4区4層	土師器	甕				外・刷毛目・内・刷毛目	10YR8/3	2.5Y7/2	微・微小白・赤色粘合む	良好	外面保付着
225	4区3層	土師器	甕				外・内輪削で・接き目	10YR8/3	10YR8/3	白・白色・微小赤色粘合多く含む	良好	
226	4区3層	土師器	甕				外・接き目・平行線文接き目・接削り・内・外輪削で?	10YR8/3	10YR8/3	白・白色・微小赤色粘合多く含む	良好	
227	6区頃	土師器	甕				外・削削り・内・外輪削で・擦で	2.5Y6/2	2.5Y6/2	微・微小白・白色粘合	良好	
228	6区3・4層	土師器	甕				外・削削り・内・刷毛目	2.5Y5/2	2.5Y6/2	白・白色粘合	良好	外面保付着
229	6区4層	土師器	甕				外・削削り・内・刷毛目	10YR8/1	10YR7/3	微・微小白・白色粘合	良好	外面保付着
230	4区3層	土師器	甕				外・内輪削で・接削り・内・刷毛目	2.5Y7/3	2.5Y6/3	白・白色多く含む	良好	
231	3区3層	土師器	甕				外・平行線文接き目・内・内・外輪削き目・擦で・刷毛目	10YR7/3	10YR8/3	微・微小白・赤色多く含む	良好	外面保付着
232	試513層	土師器	甕				外・平行線文接き目・内・刷毛目	10YR7/3	10YR7/3	微・微小白・赤色粘合	良好	
233	5区4層	土師器	甕				外・平行線文接き目・内・擦で?	10YR5/3	10YR6/2	微・微小白・少量含む	良好	外面保付着
234	4区3層	土師器	甕				外・平行線文接き目・内・擦で?	10YR8/2	10YR7/3	白・微・赤色粘合多く含む	良好	外面保付着
235	5区3層	土製品	土壇	2.1	5.2	0.6	擦で	2.5Y6/2		白・白色粘合	良好	最大径×最小径×高さ
236	表探	土製品	土壇	2.7	5.1	0.6	擦で?	10YR8/3		白・黑色粘合	良好	最大径×最小径×高さ
237	表探	灰陶陶器	甕		7.2		外・内輪削で・底部内輪削り	5Y7/1	5Y7/1	微・微小白色粘合	良好	底込内部に黒ねじき痕あり
238	5区3層	灰陶陶器	甕		(7.0)		外・内輪削削り・内・内輪削で	2.5Y7/2	2.5Y7/2	微・微小白・黑色粘合	良好	

第4節 稲田C遺跡出土須恵器の産地問題

大阪大谷大学 三辻利一

1. はじめに

行政発掘によって、日本ほど大量に土器を発掘した国はなく、また、日本ほど土器の型式学を発展させた国はない。土器型式学の方法の基盤は土器型式の詳細な観察にある。遺物の型式や文様の詳細な観察から考古学の情報を取り出す方法は京都帝国大学の梅原末治教授の築いた方法論であり、その後、それが日本考古学の大伝統となったと理解される。土器についても、日本考古学独特の土器編年として結実しており、この結果を応用すると、遺跡の各地層から出土する土器型式をみて、遺跡や出土地層の年代観を得ることが出来る。しかし、土器型式から全国各地の須恵器を分類する共通のメジャーは出来ていない。それが土器型式から須恵器の産地を推定することが困難である理由である。したがって、従来の土器の考古学研究の方法（型式学）だけでは須恵器の生産と供給の関係を再現することは困難である。須恵器の生産と供給の関係を再現しようとすると、土器型式学に加えて、何らかの新しい方法を導入することが必要である。それが胎土分析である。胎土分析によって、全国各地の須恵器を分類する方法を見いださなければならない。これが胎土分析に課せられた研究課題であった。この研究の絶好の対象となったのが窯跡出土須恵器である。

完全自動式の蛍光X線分析装置をつかって全国各地の窯跡出土須恵器を長年にわたって、大量に分析した結果、素材粘土の母岩を構成した主成分鉱物、長石類に由来するとみられる主成分元素K、Caと微量元素Rb、Srの4元素が全国共通に地域差を示す元素であることが明らかにされた。窯跡出土須恵器の地域差は通常、K-Ca、Rb-Srの両分布図上に表示される。両分布図は窯跡出土須恵器の地域差を全国共通に表示するメジャーとなる。したがって、土器型式から得られた須恵器の年代観と、胎土分析によって得られた地域差に関する情報を総合することによって、須恵器の生産と供給の関係を再現する道が開かれてきた。これが「新しい土器の考古学」である。

本報告では、稲田C遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析のデータから、その産地を推定した結果について報告する。

2. 分析方法

須恵器小破片の表面を研磨して表面付着物を除去したのち、5mm程度の小破片をタングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎し、均質化した。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして高圧を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの鋸削試料を作成した。標準試料を含めて、一定形状の試料を作成することは蛍光X線分析による定量分析では不可欠である。

完全自動式の蛍光X線分析装置（理学電機製 RIX2100、波長分散型）をつかって、蛍光X線分析を行った。この装置にはTAP、Ge、LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの2種類の検出器が装填されており、Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素を定量分析した。使用X線管球はRh管球（出力3.0kW）であり、岩石、粘土、土器中の微量元素Rb、Srを測定することができる。

定量分析のための標準試料として、岩石標準試料JG-1を使用した。分析値はJG-1の各元素の蛍光X線強度をつかって標準化した値で表示した。これをJG-1による標準化値といふ。「JG-1による標準化法」は検量線法を簡便化した方法であるが、毎日、JG-1の各元素の蛍光X線強度を測定し、装置自身の安定性をチェックすることができる点で、通常の検量線法よりも優れている。さらに、大量の試料のデータ処理や、データ表示や統計計算をする上にも「JG-1による標準化法」のほうが簡便であり、使い易いという利点がある。

3. 分析結果

はじめに、地元、上市町の中山王窯群の須恵器の化学特性をもとめた。第7表には中山王窯跡群（A、B、C地点）出土須恵器の分析データを示してある。K、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの6元素を分析した。全分析値はJG-1による標準化値である。この結果をまず、K Ca, Rb-Srの両分布図上にプロットした。第19図にはA地点、第20図にはB地点、第21図にはC地点の須恵器の両分布図を示す。ほとんどの試料を包含するようにして、長方形で中山王領域を描いた。長方形で領域を描いたのは描きやすいからである。この領域は定性的にしか領域を示さないが、他の窯群の分布領域と定性的に比較する上には大変便利であるので、筆者は必ず、分析データはまず、両分布図上にプロットし、データ解析を進めることにしている。まず、第19・20・21図を比較すると、A、B地点の試料は中山王領域の右側に偏って分布するのに対して、C地点の試料は左側に偏って分布する傾向があることが分かる。このことはA、B地点の須恵器は長石系因子と同じであるが、C地点の須恵器は少し異なることを示す。したがって、素材粘土がA、B地点の須恵器とC地点の須恵器では異なり、粘土採取の場所が異なることを意味する。さらに、第22図にはFe因子を、第23図にはNa因子を比較してある。Fe因子ではA、B地点の須恵器はC地点の須恵器に比べて少ない傾向があることも分かる。同じ中山王窯群でも粘土の採取場所が異なれば、自然界の不均質性による小さな地域差があることが分かる。したがって、A、B地点の須恵器とC地点の須恵器は元素分析によって相互識別できる可能性があることを示す。

つぎに、稗田C遺跡出土須恵器のなかに、外見上、愛知県の尾北窯群の須恵器と類似するものが混ざっている可能性があるということで、尾北窯群の須恵器と灰釉陶器の化学特性を比較した。尾北窯群の須恵器として、篠岡56号(7C中)、78号(7C末～8C初)、112号(8C前)、81号(8C中)、47号(9C)、87・96号(9C)窯跡出土須恵器片が、また、灰釉陶器としては篠岡47号(9C)、87・96号(9～10C)、15号(10C)、97号(9C末～10C)、99号(9C末～10C)、17号(11C)、80号(11C)窯跡出土の灰釉陶器片が分析された。第24図には尾北窯群の須恵器、第25図には尾北窯群の灰釉陶器の両分布図を示す。殆どの試料を包含するようにして共通の尾北領域を描いてある。須恵器も灰釉陶器も両分布図上ではほぼ、同じ領域に分布することがわかる。長石系因子で区別が出来ないことは同じ地域内で素材粘土を採取したことを示すと考えられる。しかし、第22図のFe因子をみると、明らかに、灰釉陶器のほうに、Fe量が少ないことが分かる。同じ尾北窯群の製品とはいえ、須恵器と灰釉陶器ではFe量が異なるのである。Feの少ない粘土を求めて、灰釉陶器の素材粘土を採取したことが分かる。したがって、須恵器の素材粘土と灰釉陶器の素材粘土は同じ地域内の別地点であったことは明白である。同じ地域内にもFe量が少ない粘土が産出するのである。

第26図には滑川市の万年寺谷窯跡から出土した須恵器・土師器の両分布図を示す。須恵器も土師器も万年寺谷領域内に混在するが、どちらかというと、土師器のほうがK、Rbが少ない傾向がある。もしかしたら、土師器と須恵器の素材粘土の採取場所も少しづれた別地点であった可能性も考えられる。今後の研究課題である。この図には、比較のために、中山王領域・万年寺谷領域・尾北領域を描いてある。中山王領域と万年寺谷領域は重複部分があるくらい類似しているが、尾北領域はCa、Srが少なく、両分布図上では中山王領域・万年寺谷領域とは明らかに異なることが分かる。また、第23図のNa因子でも、尾北窯群の須恵器、灰釉陶器にはNaが少なく、中山王窯の製品とは異なることがわかる。したがって、稗田C遺跡から出土した、外見上、尾北窯群の製品と類似する須恵器が尾北窯群の製品であるのか、それとも、地元製品であるのかは容易に判断できるはずである。尾北窯群の製品ではない。

つぎに、立山町の窯群の須恵器の化学特性を示そう。第27図には上末窯跡群出土須恵器の両分布図を示す。これらを包含するようにして、立山群領域を描いてある。分布する位置は尾北領域とも、中山王領域とも異なることが分かる。したがって、富山県東部地域の遺跡から出土する須恵器が中山王窯群の製品か、立山窯群の製品かを判断することができる。また、富山市、小杉町などの県西部の窯群の製品にはCa、Srが少ないことが分析データで示されており、県西部の窯群の製品か、県東部の窯群の製品かを判断することは容易である。今後、これらの基礎データを

もとに、富山県内の律令体制下の須恵器の生産と供給を再現する研究の発展が期待される。

第28図には稗田C遺跡出土須恵器の両分布図を示す。全体的に大きくばらついて分布しているが、幾つかのグループにわかれて分布することがわかる。このことは幾つかの生産地からの製品が含まれていることを意味する。両分布図での分布から大まかにa、b、c群の3群に分類した。両分布図によるこの分類が妥当であるかどうかを吟味するため、この分類結果をFe、Na因子でも対応させてみた。これら3群の須恵器のFe因子は第22図に、また、Na因子は第23図に比較されている。Fe因子ではa群のうち、No.23、25を除く6点の試料はまとまり、Na因子ではNo.23、25、26を除く5点の試料はよくまとまることが分かる。この結果、No.1、2、3、4、10の5点の須恵器の胎土は全因子で類似しており、同じ胎土であると判断された。これをa-1群とした。これらの試料はRb-Sr分布図では中山王領域の右上端に領域にまとまって分布していることが分かる。Fe、Na因子で集團からはずれたNo.23、25、26の3点をa-2群とした。他方、No.7、9、13、22の4点は両分布図でもまとまって分布するが、Fe因子とNa因子でもまとまり、同じ产地の製品と推定された。これらをb群と分類した。他の試料集團は両分布図ではまとまって分布しているが、Fe因子ではNo.11、12、20、21の4点の試料は他の集團からはずれて分布してする。これらをc-2群と分類した。したがって、No.11、12、20、21の4点以外の須恵器は同じ胎土の須恵器とみられ、同じ生産地の製品と推定された。これらの集團をc-1群と分類した。こうして、稗田C遺跡出土須恵器の産地はa-1群、a-2群、b群、c-1群、c-2群の5群に分類され、各群の須恵器の産地はどこかという問題に絞られてきた。

最後に、5群に分類された須恵器の産地の問題について述べる。まず、a群の須恵器の産地問題から考えよう。a-2群の中でも、No.26は両分布図でも、Fe、Na因子でも中山王群によく対応する。中山王窯群の製品と推定される。とくに、Fe、Na因子から、中山王窯群のA、B地点の製品である可能性が高い。No.23はK-Ca分布図では中山王領域からはずれてa-1群の須恵器の左側に分布するが、Rb-Sr分布図ではa-1群と混ざって分布する。中山王窯群のA、B地点の製品と考えられる。ここで注目すべきはFe因子やNa因子ではa-1群に対応しなくとも、Rb-Sr分布図ではa-1群とほぼ同じ領域に分布する地元製品とみられる須恵器が見つかった点である。このことはa-1群に分類された須恵器以外にも、Rb-Sr分布図で、この領域に分布する須恵器があるということである。やはり、a-1群の須恵器も地元産の須恵器であることを伺わせる。No.25は両分布図でも、Fe、Na因子でも中山王群から少しずれるが、それでも中山王窯群の製品である可能性は高い。問題はa-1群の5点の須恵器の産地問題である。a-1群の須恵器はFe因子を見る限り、中山王窯群A、B地点の須恵器とみられる。これらは胎土観察でも「胎土緻密」と観察されている。外見上の胎土観察から他の須恵器とは異なることが観察されている訳である。この点で地元製品ではない可能性が考えられたのである。これらの製品はRb-Sr分布図では中山王領域の右端に分布し、中山王領域にはびたりとは対応しない。また、Na因子ではNaが異常に多く、中山王窯群のみならず、どこの窯群にも対応しないことは第23図のNa因子の比較から分かる。Fe因子では中山王窯群のA、B地点の須恵器にほぼ対応するが、Na因子が全く対応しないところから、のままでは中山王窯群の須恵器には対応するとは考え難い。しかし、両分布図を見る限り、尾北窯群の須恵器、灰釉陶器にも全く対応しない。東海地域などの外部地域からの搬入品の可能性は殆どない。やはり、地元、中山王窯群の製品と考えるしか仕方ないであろう。ただ、中山王窯群の須恵器にはこのまま対応する訳ではない。ここで考えられたのが、尾北窯群の須恵器と灰釉陶器の胎土にみられる関係である。両者は長石系因子では同じであったが、Fe因子では明らかに異なった。この点で第22図のFe因子をみれば、これら5点の須恵器は中山王窯群の須恵器に比べて、Fe量はやや少ない点が注目される。尾北窯群ではFeの含有量が少ない粘土を探し出して灰釉陶器の素材としたように、中山王窯群でも、Fe量の少ない粘土を見つけ出し、尾北窯群における灰釉陶器的な位置付けとなる特殊品を試作的に作った可能性が考えられる。もし、このような胎土をもつ須恵器が中山王窯群の周辺の遺跡から多数検出されれば、特異な胎土をもつ特殊品を焼成した未発見の窯跡がある可能性が大きくなり、その場合には、この胎土をもつ須恵器が県西部の遺跡にまで供給されていたのかが興味をもたれる。逆に、この特異な胎

土をもつ須恵器が稗田C遺跡以外には検出されなければ、中山王窯群で試作的に製作されたものであるということになる。いずれにしても、特異な胎土をもつ須恵器であるとはいえ、外部地域からの搬入品である可能性は低い製品である。

4点のb群の須恵器はFe因子やNa因子でも中山王窯群の製品にはびたりと対応しない。別産地の製品である。両分布図の分布位置からみて立山窯群の製品である可能性が高い。中山王窯群の製品とともに、地元製品である。

これに対して、地元の窯群の領域に対応しないのがc群の須恵器である。稗田C遺跡出土須恵器の過半数を占める須恵器である。K-Ca分布図では中山王領域にも、立山領域にも対応しない。Rb-Sr分布図では立山領域の左側に分布するが、第25図のNa因子では県内東部の窯群の領域には対応しない。Naが少ないと特徴をもつ。この点ではむしろ、尾北窯群の須恵器に類似するが、もちろん、尾北窯群の須恵器ではないことはRb-Sr分布図での分布をみれば明白である。Ca、Naが少ないのは県西部の窯群の製品の化学特性である。K、Rbもほぼこれに対応する。この点で富山市を中心とした県西部の製品である可能性がでてきた。土器型式でも確認できるかどうかである。その結果如何によつては、今後、県西部の製品が県東部の遺跡にどのように供給されていたのかが研究課題として浮上する。当然、逆の、県東部の製品も県中部、西部の遺跡への供給の様相を調査、研究することが必要であろう。

富山県内では窯跡出土須恵器の分析データの整理作業が他県に比べてかなり進行しており、律令体制下における須恵器の生産と供給問題の研究を他県に先駆けて進めることができた。官窯で製作された須恵器は「調」として、官衙クラスの遺跡へ供給されていたであろう。そのことを今後の研究によって実証することになる。さらに、莊園クラスの遺跡への須恵器の生産・供給の関係はどうなっていたのであろうか？ 莊園クラスの遺跡出土須恵器の产地問題に関する研究は全国的に見ても殆ど手付けられていない。今後の研究課題である。今後、土器型式の整理とともに、胎土分析によって須恵器の生産と供給の再現を通して、8～9世紀代の富山地域の歴史の再現への道が開かれて来るであろう。

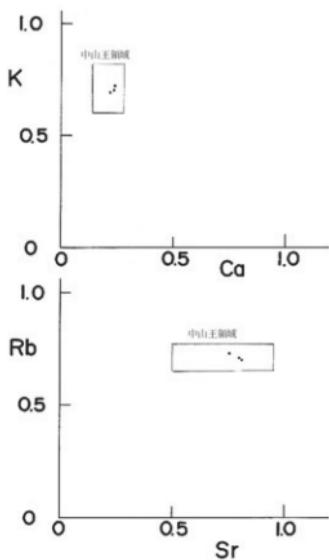
第7表 中山王墓跡群出土須恵器の分析データ

試料番号	分析番号	地点	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	22-175	C	0.575	0.121	1.880	0.652	0.526	0.178
2	22-176	C	0.656	0.168	1.620	0.720	0.604	0.267
3	22-177	C	0.813	0.180	1.330	0.767	0.922	0.385
4	22-178	C	0.720	0.225	1.170	0.730	0.870	0.340
5	22-179	C	0.707	0.202	1.490	0.762	0.650	0.257
6	22-180	C	0.667	0.223	1.300	0.721	0.726	0.289
7	22-181	C	0.652	0.200	1.160	0.726	0.703	0.328
8	22-182	C	0.654	0.141	1.880	0.738	0.497	0.186
9	22-183	C	0.649	0.176	2.000	0.672	0.599	0.275
10	22-184	C	0.623	0.189	1.380	0.712	0.654	0.323
11	22-185	C	0.705	0.178	1.430	0.730	0.680	0.271
12	22-186	C	0.650	0.162	1.680	0.717	0.573	0.250
13	22-187	C	0.682	0.160	1.670	0.711	0.582	0.236
14	22-188	C	0.703	0.217	1.440	0.685	0.709	0.288
15	22-189	C	0.615	0.186	2.010	0.641	0.586	0.257
16	22-194	B	0.688	0.205	1.090	0.701	0.750	0.301
17	22-195	B	0.723	0.236	1.040	0.723	0.823	0.332
18	22-196	B	0.684	0.215	1.110	0.709	0.786	0.291
19	22-197	B	0.771	0.190	1.400	0.736	0.661	0.257
20	22-198	B	0.704	0.265	1.210	0.736	0.802	0.301
21	22-199	B	0.696	0.213	1.350	0.689	0.715	0.291
22	22-200	B	0.701	0.235	1.090	0.735	0.832	0.312
23	22-201	B	0.755	0.221	1.060	0.748	0.814	0.317
24	22-202	B	0.718	0.203	1.150	0.710	0.723	0.272
25	22-203	B	0.687	0.268	1.050	0.735	0.864	0.334
26	22-204	B	0.636	0.161	1.140	0.749	0.631	0.266
27	22-205	B	0.646	0.163	1.550	0.685	0.664	0.248
28	22-206	B	0.673	0.173	1.480	0.672	0.616	0.244
29	22-207	B	0.668	0.231	1.170	0.725	0.768	0.305
30	22-208	B	0.708	0.220	1.100	0.718	0.780	0.305
31	22-209	A	0.724	0.241	1.020	0.703	0.810	0.328
32	22-210	A	0.701	0.237	1.160	0.713	0.800	0.337
32	22-210	A	0.689	0.219	1.150	0.725	0.748	0.294

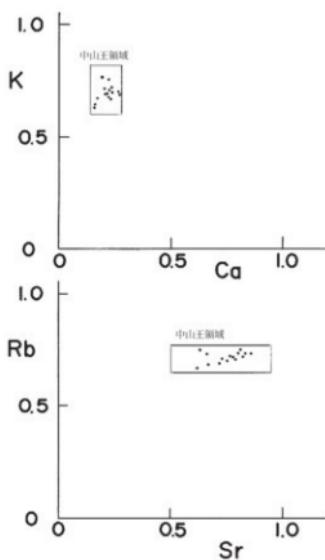
第8表 駒田C 遺跡出土須恵器の分析データ

試料番号	分析番号	図番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
1	22-190	48	有台杯	0.822	0.260	0.947	0.752	1.060	0.546	a-1
2	22-191	48	有台杯	0.854	0.245	0.918	0.787	0.987	0.506	a-1
3	22-192	65	有台杯	0.847	0.247	0.932	0.761	1.010	0.514	a-1
4	22-193	65	有台杯	0.834	0.253	0.947	0.799	1.080	0.520	a-1
5	22-212	3	杯蓋	0.503	0.071	1.530	0.714	0.427	0.121	c-1
6	22-213	4	杯蓋	0.496	0.083	1.390	0.664	0.446	0.113	c-1
7	22-214	21	杯蓋	0.560	0.114	1.870	0.700	0.627	0.216	b
8	22-215	10	杯蓋	0.490	0.126	1.460	0.648	0.453	0.182	c-1
9	22-216	8	杯蓋	0.491	0.159	2.060	0.676	0.565	0.189	b
10	22-217	25	杯蓋	0.772	0.214	0.993	0.774	0.926	0.498	a-1
11	22-218	18	杯蓋	0.434	0.047	2.940	0.577	0.319	0.063	c-2
12	22-219	29	杯蓋	0.615	0.082	2.730	0.674	0.309	0.151	c-2
13	22-220	97	杯	0.480	0.142	1.720	0.645	0.627	0.187	b
14	22-221	113	杯	0.545	0.053	1.870	0.705	0.331	0.080	c-1
15	22-222	46	有台杯	0.478	0.049	1.770	0.664	0.340	0.056	c-1
16	22-223	68	有台杯	0.478	0.129	1.730	0.621	0.426	0.194	c-1
17	22-224	44	有台杯	0.385	0.079	1.670	0.571	0.327	0.087	c-1
18	22-225	46	有台杯	0.540	0.047	1.940	0.698	0.325	0.074	c-1
19	22-226	57	有台杯	0.388	0.129	1.350	0.545	0.394	0.134	c-1
20	22-227	60	有台杯	0.534	0.072	2.410	0.725	0.333	0.091	c-2
21	22-228	49	有台杯	0.506	0.084	2.640	0.577	0.355	0.109	c-2
22	22-229	131	壺?	0.562	0.140	1.390	0.649	0.575	0.242	b
23	22-230	138-140	壺	0.866	0.138	1.720	0.805	0.972	0.314	a-2
24	22-231	144	壺	0.128	0.483	0.077	1.290	0.639	0.382	c-1
25	22-232	143	壺	0.760	0.221	2.260	0.787	0.775	0.228	a-2
26	22-233	146-154	壺	0.664	0.184	1.090	0.690	0.729	0.287	a-2
27	22-234	161-162	壺	0.486	0.068	1.300	0.643	0.331	0.129	c-1
28	22-235	159-160	壺	0.483	0.078	1.340	0.662	0.321	0.123	c-1
29	22-236	163-164	壺	0.505	0.111	1.500	0.686	0.382	0.159	c-1
30	22-237	155-158	壺	0.534	0.103	1.890	0.708	0.389	0.096	c-1

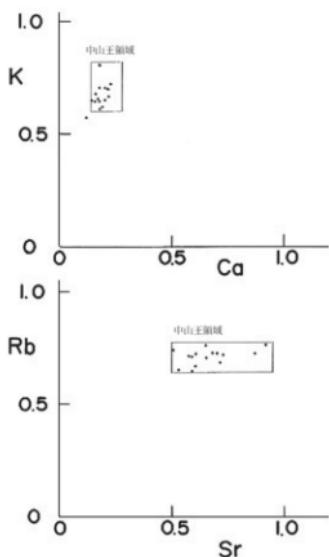
※図番号は同一個体品を含む



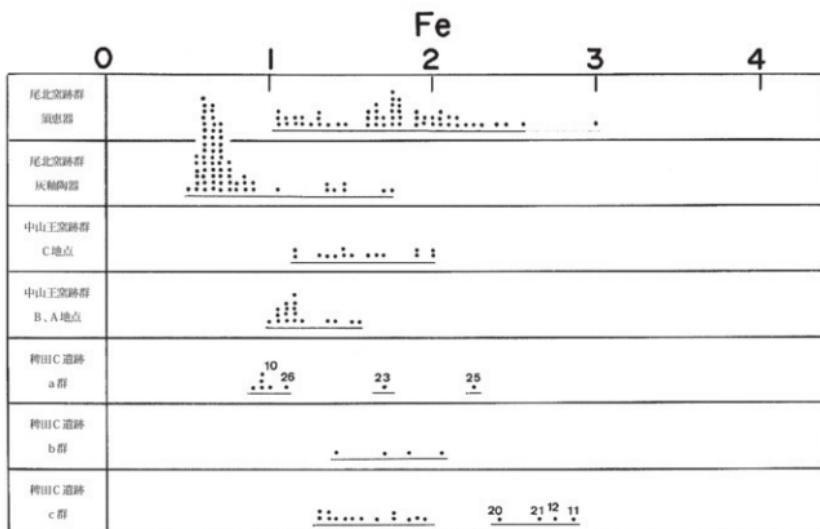
第19図 中山王窯跡群（A地点）出土須恵器の両分布図



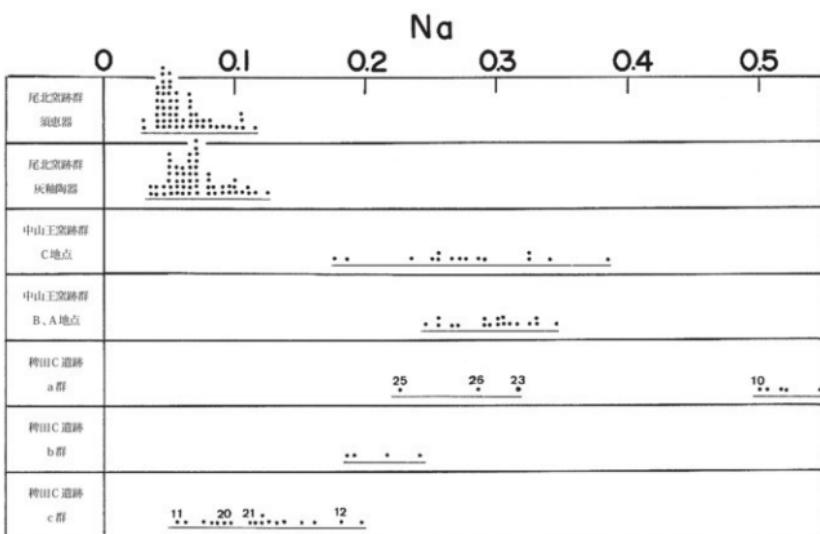
第20図 中山王窯跡群（B地点）出土須恵器の両分布図



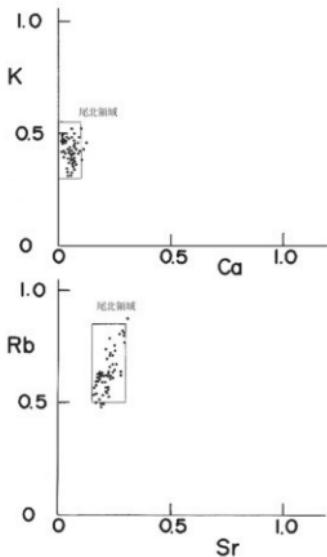
第21図 中山王窯跡群（C地点）出土須恵器の両分布図



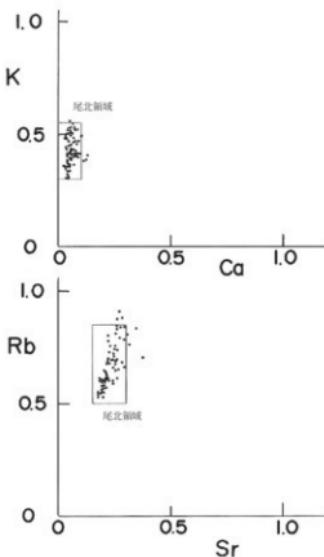
第22図 Fe因子の比較



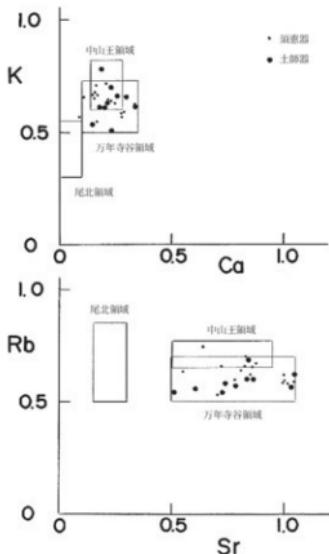
第23図 Na因子の比較



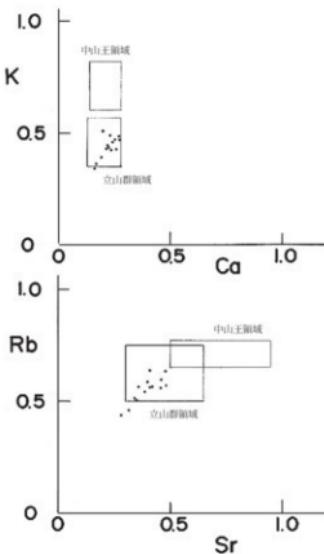
第24図 尾北窯跡群出土須恵器の両分布図



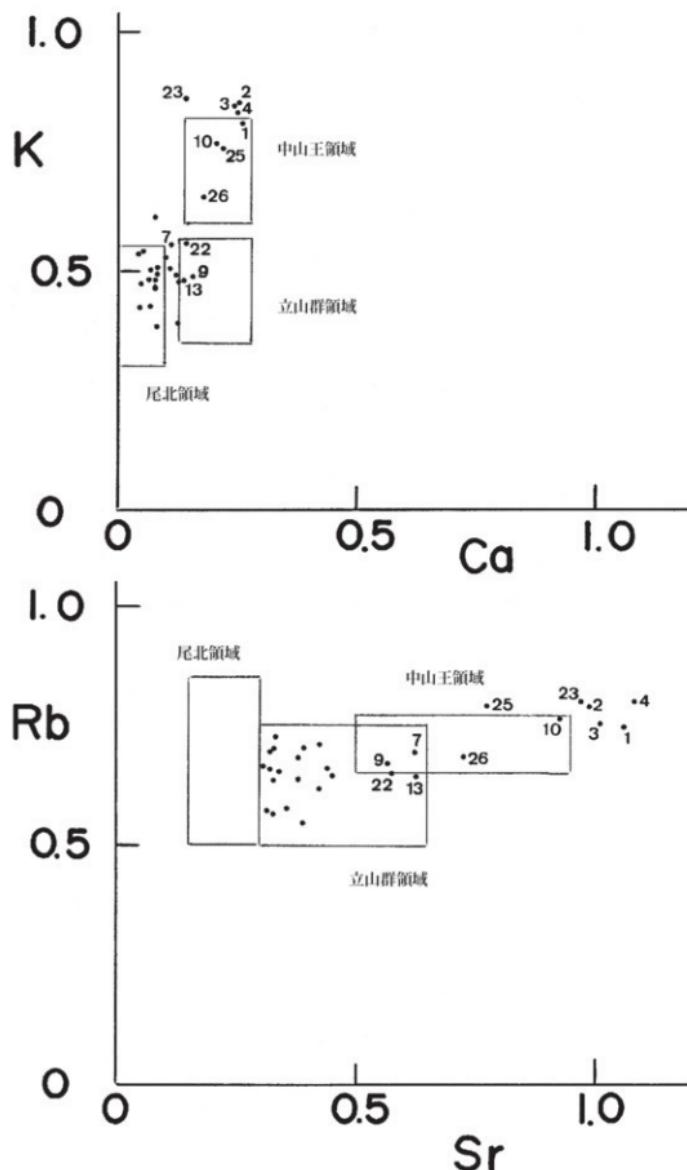
第25図 尾北窯跡群出土灰釉陶器の両分布図



第26図 万年寺谷窯跡出土須恵器の両分布図



第27図 上末窯跡群出土須恵器の両分布図



第28図 稲田C遺跡出土須恵器の両分布図

第4章 まとめ

今回の発掘調査の結果をここまで述べてきたが、そこから得られた見解を簡単に整理し、本報告のまとめとしたい。

調査の概要

稗田C遺跡は富山県中新川郡上市町稗田地内に所在する奈良時代を中心とする遺跡で、上市川の旧河道と白岩川に挟まれた冲積扇状地微高地上に立地する。今回の調査は公民館建設工事に伴って遺跡範囲の中央北寄りの地点において実施したもので、調査面積は98m²である。調査では、遺構としては性格不明の穴が1基検出されたのみであるが、遺物包含層から須恵器・土師器を中心とする多量の遺物が出土した。遺物の年代は7世紀末～9世紀後半に及ぶが、主体となるのは概ね8世紀中葉～後半である。その他、ごく少量の中世・近世遺物も出土している。

須恵器の産地について

今回出土した須恵器の一部について、蛍光X線による胎土分析を行い産地の推定を試みた（第3章第4節）。その結果、形態・胎土とともに近隣で類例が見当たらず他地域からの搬入品と推定していた一群（a-a群、48・65等）については、直接は対応しないながらも本遺跡の直近に位置する中山王窯で生産された特殊品である可能性が示唆された。また、同じ古代新川郡内の上末窯の製品と判定されたb群は量的に少ない一方で、出土須恵器の主体をなすc群については富山県東部域の窯跡群には全く対応せず、富山市を中心とした県西部域からの搬入品である可能性を示す結果が得られた。

新川郡の須恵器窯は、6世紀末～8世紀初頭は上市町堤谷横山窯及び中山王窯、8世紀後葉～10世紀代は立山町上末窯を中心しながら9世紀代に上市町亀谷窯と滑川市万年寺谷窯が単発的に貢入する、という大まかな流れを追うことができる（第29図）。しかし、中山王窯から上末窯への窯場の移動時期、つまり中山王窯の終焉と上末窯の開窯に関しては不明確な部分が多く、現在のところ8世紀代を中心として操業された窯が確定できていない。この中山王窯～上末窯の過渡期を含む本遺跡の須恵器に対する今回の分析結果は、この時期の新川郡内では、中山王窯・上末窯内、あるいは他の場所に現在未発見の須恵器窯が存在して域内の集落に須恵器を供給していたと仮定するよりは、一時的に須恵器窯の空白期間があり、該期の須恵器は他都からの供給品によって賄われていた可能性が高いことを示唆している。ただし、これは本遺跡の分析結果のみから類推されたものであって、ここだけの特異な事例であつた可能性も考慮する必要がある。今後の分析事例の増加を待ってあらためて検討してみたい。

	6世紀	600	7世紀	700	8世紀	800	9世紀	900	10世紀
堤谷横山窯									
中山王窯			A地点 1群	C地点 2群	A地点 2群	B地点 1群			
上末窯							左光寺谷1号・4号 笛谷1号	3号・5号 4号・3号・6号・5号・2号	
亀谷窯									
万年寺谷窯									

第29図 古代新川郡における須恵器窯の消長

稗田C遺跡の背景について

天平15年（743年）に制定された「聖田永年私財法」を契機として、有力寺社や貴族などが各地で大規模な開拓を行うようになり、いわゆる初期莊園が成立した。越中国は東大寺領莊園が多く設置されたことが知られているが、新川郡内には天平宝字3年（759年）の「大蔽莊開田図」「丈部莊開田図」及び神護景雲元年（767年）の「大荊莊開田図」によって、大蔽莊（=大荊莊）と丈部莊の2莊が設置されていたことがわかっている。その位置については、藤田富士夫氏によつて前者は立山町浦田から稚子塚、舟橋村海老江から古海老江の地域に囲まれた範囲、後者については東は上市町中青出、西は富山市水橋中馬場、南は上市町放土ヶ瀬、北は富山市水橋北馬場から上市町久金の範囲に比定されている（藤田1998・2001）。本遺跡の性格については、地理的に近い大蔽莊との関わりの中で理解するならば「7世紀代から存在した小規模な集落が8世紀中葉以降の大蔽莊の開拓に伴つて発展した姿」として認識することが可能であろう。

なお、本遺跡とは白岩川を挟んで対岸に位置する辻遺跡では、1989年に立山町教育委員会によって行われた発掘調査で、雲亀元年（715年）から天平12年（740年）頃の期間のみ設定されていた役人名称「里正」が記された木簡が出土している（立山町教育委員会1990）。また、大荊莊開田図に「從都川枯往道」と記された道の延長線上に位置することも合わせ、辻遺跡は当時の末端行政単位であった「郷」のうち「川枯郷」の郷衙であったものと推定されている（藤田前掲）。川枯郷は辻遺跡の周辺に密集する奈良・平安時代遺跡を包括するような白岩川左岸～柄津川流域を中心とする範囲が想定され、稗田C遺跡はその外側に存在した集落と考えることができる（第30図）。

ところで、前項で触れた上末窯の成立には大蔽莊の関与があったことが以前より想定されている（宇野1989）。しかし、現時点での資料による限り大蔽莊の開拓開始と上末窯の開窯時期には若干のタイムラグが生じている。このことは、上末窯産須恵器を主体とせず、かつ既存の郷域の外部に位置する稗田C遺跡のような集落は、大蔽莊の経営が軌道に乗る以前、開拓初期の段階における労働力徴発を目的として新規に設けられたものであった可能性を示すものであろう。



第30図 古代郷域と莊園推定地（藤田2006より転載）

【参考文献】

- 愛知県教育委員会 1959『愛知県猿投山西南麓古窯址群』
- 愛知県教育委員会 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』(報告編・資料編)
- 石原与作 1955『白萩小史』白萩中学校
- 池野正男 1987『射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡』『大境』第11号、富山考古学会
- 内田垂紀子 1999『富山県の古代施釉陶器』『富山考古学研究一紀要第2号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 内田垂紀子 2001『任海宮田遺跡出土の灰陶器』『富山考古学研究一紀要第4号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 宇野隆大 1989『第2章 上木窯の立地と歴史的環境』『越中上木窯』富山大学人文学部考古学研究室
- 宇野隆大 1991『律令社会の考古学的研究ー北陸を舞台としてー』桂書房
- 宇野隆大 2001『莊園の考古学』青木書店
- 大島町教育委員会 1995『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』
- 上市町 1970『上市町誌』
- 上市町 2006『新上市町誌』
- 上市町教育委員会 1982『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町土器・石器編ー』
- 上市町教育委員会 1984『富山県上市町弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』
- 上市町教育委員会 1992『富山県上市町湯神子A道路発掘調査概報』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『石名田木舟遺跡発掘調査報告ー能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲー』
- (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ—公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵー』
- 齊藤孝正・後藤建一編 1995『須恵器集成図録 第3巻 東日本編Ⅰ』雄山閣出版
- 大門町教育委員会 1986『石名山窯跡発掘調査報告』
- 田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定—加賀地域にみる7世紀から11世紀中頃にかけての土器群の推移ー』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』(報告編) 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 立山町教育委員会 1987『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
- 立山町教育委員会 1990『辻遺跡—第2次発掘調査報告書ー』
- 高岡市教育委員会 2008『常国遺跡調査報告ー平成4・5年度、常国住宅団地造成事業に伴う調査ー』
- 富山県教育委員会 1980『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』
- 富山県教育委員会 1982『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要』
- 富山県教育委員会 1984『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2002『富山市柄谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 富山市教育委員会 2006『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989『越中上木窯』
- 砺波市教育委員会 2005『安川天皇窯跡発掘調査報告ー柏原窯跡群における須恵器窯跡の調査ー』
- 砺波市教育委員会 2007『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ—平成17年度一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財調査報告書ー』
- 鶴富田富士夫 1998『東大寺領大藏荘の現地比定と遺跡』『森浩一70の疑問 古代探求』中央公論社
- 鶴富田富士夫 2001『東大寺領越中国庄園「太郎莊」の現地比定と若干の考察』『富山史蹟』第135・136号併合併、越中史壇会
- 鶴富田富士夫 2006『地域文化の発展と領域化』『新上市町誌』上市町
- 滑川市教育委員会 1976『富山県滑川市万寺谷遺跡発掘調査報告書』
- 柄崎朝一 1979『日本古代の土器・陶磁器』世界陶磁全集2 日本古代 小学館
- 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 北陸古代土器研究会 1994『北陸古代土器研究』第4号
- 織田真澄 2001『任海宮田遺跡出土の土師について』『富山考古学研究一紀要第4号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 前川要 1984『猿投窯における灰釉陶器生產最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にしてー』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ、瀬戸市歴史民俗資料館
- 森隆 2001『富山県出土の土師集成』『富山考古学研究一紀要第4号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 吉岡康鶴編 1983『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会



図版1 周辺航空写真（1953年米軍撮影、縮尺約1/11,000）